

出家者の修行場所

— 『根本説一切有部毘奈耶臥坐具事』 *Śayanāsanavastu* の和訳 (1) —

岩田 朋子

はじめに

これより、*Śayanāsanavastu* と呼ばれる出家者の修行場所に関する規則の集成について、サンسكريット原典を底本として和訳を試みる。この *Śayanāsanavastu* (以下、*ŚAV* とする) とは、*śayana-āsana* 「臥処と坐処」、*vastu* 「章 (漢訳では「事」)」 という意味で「臥処と坐処の章」となる。この章は、根本説一切有部が伝持した律蔵 *Mūlasarvāstivāda-vinaya* (=以下、*MSV* とする) の中、犍度部に含まれる 15 番目の章である¹。

ŚAV の主題は、ヴィハラー (*vihāra* / 漢訳: 精舎, 房) の布施とその享受, そして運営である。出家者は、四つの基本原則 (四依) に遵って修行生活を送る。その四つの基本原則とは、糞掃衣・乞食・樹下坐・陳棄葉と律蔵において規定される。ヴィハラーは、布施がなされた場合、樹下坐に準ずるものとして許可された施設である²。よって、ヴィハラーをはじめとする人工建造物の宗教施設が認められたことで、出家者は修行生活場所の選択肢が増え、仏教教団としては新たな活動拠点を獲得していくこととなった。

このことを在家者側からみれば、ヴィハラーを布施することで釈尊の教説にふれることのできる「聞法」の場所を多くの人々に提供することとなり、布施物のなかでも最上の果報をもたらすとまでいわれた。つまり、ヴィハラーという施設を通して、出家者側にも在家者側にも双方に多大な影響があった。もちろんヴィハラーは「建立する」ということだけが主眼ではなく、それを継続的に維持していくことが重要といえる。

この *ŚAV* に該当する犍度は、他の部派が伝持してきた律蔵にも見られる。広律として、上座部所属の *Vinaya Piṭakam* (=以下『パーリ律』)、法蔵部所属の『四分律』、彌沙塞部所属の『五分

¹ 律蔵はその構成内容から、(1) *prātimokṣa* (波羅提木叉 / 戒条文)・(2) *sūtravibhaṅga* (經分別 / 戒条文の制定と因縁譚)・(3) *khandaka* (犍度部 / 律条文の制定と因縁譚)、そして (4) (*parivāra* / 主に (2) と (3) の補足) に分類される。(1) と (2) は個人が遵守しなければならない規定 (戒) について、(3) は集団生活に関する規定 (律) について述べられている。従って、*ŚAV* は (3) の部分に分類される。

² *Vinaya II*, p.146ff.

律』, 説一切有部所属の『十誦律』, 大衆部所属の『摩訶僧祇律』がある。これら六つの部派の律蔵に伝えられた「臥処と坐処の章」は、まとめて「臥坐具犍度」とも呼ばれる。しかし、この臥坐具犍度は全体の構造からみれば、異なる点があり各々の特徴を備えていることを確認できる³。そのなかでも、MSV の ŚAV はそのほとんどを avadāna や jātika が占めており、規則の制定やその内容が他の律蔵に比べて少ないという特異な構成となっている。これを明らかにするために、ŚAV 全体をサンスクリット語テキストから和訳する。和訳に先立ち ŚAV の構成内容を示すと、以下ようになる。

< ŚAV の構成内容 >

1. 法臘に従って敬礼し、法臘の順に施食を受けるべきこと 現前サンガにおける実際の布施物の配分は、より年長のもの〔先に受戒した者〕の順になすことが制定される。その因縁譚として、ウズラと猿と象と兎の過去世物語が引用される。
2. カルヤーナバドラ (kalyāṇabhadra) 長者教団最初の vihāra の建立 (布施) ヴァーラーナシーの住人である長者が施主となり、サンガに最初のヴィハーラの布施をなす。ここでは、ブッダがどのようにヴィハーラの布施を許可していったのかを「過去の正等覚者達の声聞が考えていた住処」に関する観察を通して、ヴィハーラ布施の享受の過程を述べる。
3. アナータピンダダ (Anāthapiṇḍada, 給孤独) 長者の誕生物語と奇跡的行為
4. アナータピンダダのヴィハーラ建立申請と工事監督役の比丘 (navakammika) の派遣
5. アナータピンダダによるジェータヴァナ (祇園) の布施
6. シャーリプトラと外道との術比べ
7. ジェータヴァナにおけるシャーリプトラの vihāra 建築作業
8. アナータピンダダによるブッダへの使者の派遣
9. ブッダのシュラーヴァスティ到着とブッダが都市に入る際に起こった出来事
10. アナータピンダダによるジェータヴァナの布施
11. アナータピンダダの過去世物語 アナータピンダダの過去世での名前と、彼が過去世でも土地を金貨で敷き詰め、それを過去七仏各々に布施をなしたことが詳細に語られる。
12. アナータピンダダへの称賛ともう一つの過去世物語 アナータピンダダはあらゆる財宝を眺めることのできる力を有するとされる。このことについて彼の過去世が言及され、彼の業の異熟が原因だと説かれる。
13. 布施物の受用に関する規定 (建物の受用と建物以外の生活資具などの受用)
14. 建物及び臥坐具の分配方法に関する規定
15. 施食の享受と分配方法に関する規定 雨安居時の場合の分配方法と阿蘭若住比丘への分配について説かれる。
16. 空いているヴィハーラを貸した場合の管理
17. 盗難対策
18. ウパナンダの非行 二ヶ所以上の場所で臥坐具を受け取ってはいけないという規定が説かれる。
19. 建物及び臥坐具の分配方法に関する規定 比丘間の鬭争が予想される場合の対処方法と罹病

³ 筆者は 2006 年度に課程博士学位申請論文『臥坐具犍度の研究』を提出し、そこにおいてヴィハーラの布施に焦点を当て、各律の臥坐具犍度に関する比較研究を行った。

の比丘への対処方法が説かれる。

20. 教説を講じる者と教説を学ぶ者、各々が座す位置の指示

21. 建物及び臥坐処で使用する資具の分配方法

21-1. 客比丘が臥坐処に夜間に到着した場合の対処方法

22. アナータピンダダのもう一つの布施物語（井戸の布施とその使用について）

23. 施食の享受

24. 建物及び臥坐具の分配方法（19の補足）

25. 野外における臥坐処の取得・分配方法

26. ヴィハーラの指示者（vihāroddeśaka）の制定

27. 他の役職の任命及び役職列挙 ヴィハーラの指示者（vihāroddeśaka）の役職の条件には、五法（1. 欲望故に流されないこと。2. 怒り故に流されないこと。3. 愚かさ故に流されないこと。4. 怖れ故に流されないこと。5. 素晴らしいことと素晴らしくないことを知っていること）が挙げられる。食事の指示者（bhaktoddeśaka）、粥の準備者（yavāgūcāraka）、固形の食べ物の配分者（khādyakabhājaka）、こまごました物の準備者（yatkiṃciccāraka）、倉庫の番人（bhāṇḍagopaka）、衣の番人（cīvaragopaka）、衣の配分者（cīvarabhājaka）、雨期用の衣の番人（varṣāsāṭigopaka）、雨期用の衣の配分者（varṣāsāṭibhājaka）、浄人の管理者（preśaka）が列挙される。これらはヴィハーラの指示者の条件に従って任命されると説かれる。

ŚAV のテキストについて

さて、ŚAV のテキストは、すでに刊行されているサンスクリットテキストがあり、N. Dutt 氏編のもの（以下、Dutt 本と略す）と S. Bagchi 氏編のもの（以下、Bagchi 本と略す）、そして R. Gnoli 氏編のもの（以下、Gnoli 本と略す）が存在する。この内、Dutt 本と Bagchi 本の両テキストはいずれも、Gnoli 本の第 19 頁の 1 行目にあたる箇所（... rātrāv alpaśabde）までで中断している。一方、Gnoli 本は、チベット語訳全体と一致し、完結した形を取っている。従って、ここでは Gnoli 本を底本として採用する。また、チベット語訳を参照する場合には、北京版（和訳中では P と略す）と台北版（和訳中では D と略す）を使用する。尚、漢訳に相当する『根本説一切有部毘奈耶臥坐具事』は残存していない。

【サンスクリット語テキスト】

- *Gilgit Manuscripts*, vol. III, part 3, edited by Nalinaksha Dutt, *Bibliotheca Indo-Buddhica* no. 18, Delhi: Sri Satguru Publications, Orig. pub., Srinagar, 1943; Second edition, 1984, pp. 121-144.
- *Mūlasarvāstivāda-vinayavastu*, vol. II, edited by S. Bagchi, *Buddhist Sanskrit Texts* no. 16, Darbhanga: The Mithila Institute, 1970, pp. 60-73.
- *The Gilgit Manuscript of the Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu - Being the 15th and 16th Sections of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, edited by Raniero Gnoli, Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1978, pp. 3-56.

- *Gilgit Buddhist Manuscripts: Facsimile Edition (Śata-Piṭaka Series 10)*, ed. R.Vira and L. Chandra, part 6, New Delhi, 1974, 942-949 (Bl.No.314a.5-318b.11). (=以下 GBM とする)

【チベット語訳】

- Gnas-lam-gyi gshi, *The Tibetan Tripitaka*, Peking Edition, Vol. 41, No. 1030, Ne 179a3-212a2.
- Gnas-lam-gyi gshi, *The Tibetan Tripitaka*, Taipei (Sde-dge) Edition, Vol. I, Ga 187a1-222a5.

翻訳に際して

ŚAV についてはこれまで全体を翻訳されたものはないが、すでに G. Schopen 氏が Gnoli 本の最初から第 33 頁の 7 行目までの範囲（全体の約 6 割）を詳細な註記を付して英訳している。従って、前半部分を和訳する際にはこの英訳を参照する。また、関西大学によるサヘート・マヘート遺跡の発掘調査に伴い、祇園精舎布施の因縁譚のみについては丹治昭義氏による和訳がなされている。

- Gregory Schopen, "Hierarchy and Housing in a Buddhist Monastic Code: A Translation of the Sanskrit Text of the *Śayanāsanavastu* of *Mūlasarvāstivāda-vinaya*, Part One [from the Sanskrit]", *Buddhist Literature*, vol. 2 (2000), pp. 92-196.
- 丹治昭義「3 祇園精舎建立縁起の一考察」『祇園精舎-サヘート遺跡発掘調査報告書- 本文編』関西大学 日・印共同学術調査団 1997, pp.1371-1408.

【比較した諸律臥坐具捷度相当箇所】

- Hermam Oldenberg, ed., *Cullavagga II, Vinaya Piṭakam* vol. II, PTS, 1981, pp.146 -178.
- 弗若多羅共鳩摩羅什訳『十誦律』卷第三十四・八法中臥具法第七 (No.1435, 大正 23, pp.242a15-251a15.)
- 仏陀耶舎共竺仏念等訳『四分律』卷第五十・房舎捷度初, 卷第五十一・房舎捷度之餘 (No.1428, 大正 22, pp.936b18-945a19.)
- 仏陀跋陀羅共法顯訳『摩訶僧祇律』卷第二十三・明雜誦跋渠法之一 (No.1425, 大正 22, p.415a29-c9.) 卷第二十七・明雜誦跋渠法之五 (No.1425, 大正 22, pp.443c4-446c6.)
- 仏陀什共竺道生等訳『彌沙塞部和醯五分律』卷第二十五・第五分之二臥具法 (No.1421, 大正 22, pp.166b8-169a23.)

今回の和訳では、すでに筆者が論じたヴィハーラ布施の因縁譚以外の箇所を中心として、ŚAV 以外にも他の臥坐具捷度相当箇所を参照し、同内容の記述についてはそれを示すこととした。

【略号】

- Gnoli = Gnoli 本
- D = Taipei (Sde-dge) Edition
- P = Peking Edition
- Divyāvādāna = *The Divyāvādāna: Collection of Early Buddhist Legends*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil, Orig. pub., Cambridge, 1886; Reprint ed., Delhi: Indological Book House, 1987.
- Apte = *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, edited by Prin. Vaman Shivaram Apte, revised and enlarged edition, Orig. pub., Poona, 1957; Reprint ed. Kyoto: Rinsen Book Company, 1998.
- BHSG, BHSD = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, volumes I-II, edited by Franklin Edgerton, Orig. pub., London, 1953; Reprint ed., Kyoto: Rinsen Book co., 1985.
- PED = *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, edited by T. W. Rhys Davids and William Stede, Oxford, 1921-1925; Reprint ed., 1999.
- 藏漢大辭典 = 勤縣江主莉『藏漢大辭典』北京：民族出版社，1998.
- Das = *A Tibetan-English Dictionary*, edited by Sarat Chandra Das, Calcutta, 1902.
- Jäschke = *A Tibetan-English Dictionary*, edited by Heinrich August Jäschke, Orig. pub., London, 1881; Reprint ed., Kyoto: Rinsen Book Company, 1993.
- Lokesh Chandra = *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, edited by Lokesh Chandra, New Delhi, 1959.
- DPPN = *Dictionary of Pāli Proper Names*, by G. P. Malalasekera, Orig. pub., 1937-1938; Reprint ed., New Delhi: Munshiram Manoharlal publishers Pvt Ltd., 1995.
- 『印度仏教固有名詞辞典』 = 赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』京都: 法蔵館, 1967.
- Schopen = Gregory Schopen, "Hierarchy and Housing in a Buddhist Monastic Code: A Translation of the Sanskrit Text of the *Śayanāsanavastu* of *Mūlasarvāstivāda-vinaya*, Part One [from the Sanskrit]", *Buddhist Literature*, vol. 2 (2000), pp. 92-196.

※なお、訳文中の記号については、

<> = Gnoli 本において<>で囲まれている部分を指す。写本には無いが、Gnoli が補足したもの。Tib 訳から再構築した箇所もある。

《》 = Gnoli 本において・・・と記され、Skt テキストが記されていない部分を指す。この箇所については Tib 訳から和訳した。

[] 内に記した頁数は Gnoli 本の頁の開始位置である。

見出しには Gnoli の用いる英文見出しを用いた。これは Gnoli 本の巻末に付してある目次との対照を容易にするためである。

臥坐具事 和訳

[p. 3] 撰頌

「シャーキャ族の者達」と「五人」と、以下、「サンガのもの」と「個人のもの」と「事の中断により」と「矯正を行うべき」と「土地」と「アランヤ」と「三衣」と「肥沃にすべき」と「アランヤ」と「上座比丘」と、「獲得物と六〔群比丘〕による」が最後である⁴。

[p.3, l.7] *Old monks are entitled to veneration*

仏・世尊はシュラーヴァスティ（Śrāvastī）の中のジェータヴァナ（Jetavana）におけるアナタピンダダ長者のアーラーマ（Anāthapiṇḍadasyārāma）に住していた。さて、その時、多く

⁴ 「シャーキャ族の者達」の原語は śākya であり、サンガにおいて敬うべき者とは誰であるのか、という討論と「法臘」の制定に関する箇所 (Gnoli, p. 3, l. 8- p. 10, l. 12) を指すと考えられる。
 「五人」の原語は paṃcanaka であるが、Dutt は paṃcaka (p. 111, l. 1) とし、Tib も lnga sde (P. 179a4; D. 187a1) とするので、ブッダが教化した五人の比丘達に関する箇所 (Gnoli, p. 10, l. 14- 11, l. 5) を指すと考えられる。従って、ここでは Dutt の読み通り、paṃcaka と見なして訳す。
 「サンガのもの」と「個人のもの」の原語は saṅghikaṃ paudgalikaṃ であり、サンガに対する布施と個人に対する布施に関する箇所 (Gnoli, p. 33, l. 9- p. 33, l. 25) を指すと考えられる。
 「事の中断により」の原語は vastubhaṅga であり、災難による雨安居を中断した比丘達に関する箇所 (Gnoli, p. 34, l. 2- p. 34, l. 26) を指すと考えられる。
 「矯正を行うべき」の原語は kārayet pratisamstarāṇa であり、放蕩な比丘達に対する教育に関する箇所 (Gnoli, p. 35, l. 1- p. 35, l. 11) を指すと考えられる。
 「土地」の原語は bhūmi であるが、前 (pratisamstarāṇa: 矯正) と後 (araṇya: アランヤ) が指す位置の間に、「土地 (bhūmi)」の語は出ない。しかし、この位置にはたくさんの比丘が一つの都市に来たため、宿泊部屋が足りずに困ったという記載がある。これを「土地」という語で指していると考えれば、該当箇所は (Gnoli, p. 35, l. 12- p. 35, l. 17) となる。しかし、この撰頌における語の並びが、このテキストの配置と合致しているかどうかは判断ができないため、この bhūmi が指す箇所に関しては問題として残しておくざるを得ない。
 「アランヤ」の原語は araṇya であり、アランヤに住する様になった比丘達が盗難にあい、修行へ集中できなくなったことに関する箇所 (Gnoli, p. 35, l. 18- p. 36, l. 13) を指すと考えられる。しかし、この箇所の直前には、たくさんの比丘達が一つの都市に来たため、宿泊する部屋に困ったという記載がある。もし、この記事との因果関係を想定すれば、「アランヤ」が示す箇所の開始位置は、p. 35, l. 12 となる。
 「三衣」の原語は tricīvara であり、三衣を纏う比丘がヴィハーラを掃除しなかったことに関する箇所 (Gnoli, p. 36, l. 14- p. 37, l. 5) を指すと考えられる。「肥沃にすべき」の原語は ucchedya である。この ut-√ chid の派生語はこのテキストにおいて何処にも見あたらない。しかし、撰頌内の前 (tricīvara: 三衣) と後 (araṇya: アランヤ) の語が示す位置との関係から、この語が utsvedya を指すと推測できる。また、Tib も snum pa (P. 194a4; D. 187a1-2) とし utsvedya を支持する。従って、「肥沃にすべき」と訳した。これは、在家者が建立したヴィハーラに住む者が居ない時に、比丘によってそのヴィハーラを「肥沃にすべきである」と教えられる箇所 (Gnoli, p. 37, l. 6- p. 38, l. 13) を指すと考えられる。
 「アランヤ」の原語は、上記のものと同じく、araṇya であり、アランヤに住する比丘が盗難にあったことに関する箇所 Gnoli, p. 38, l. 14- p. 39, l. 5) を指すと考えられる。
 「上座比丘」の原語は bhikṣusthavira であり、ウパーリが上座比丘達に対してヴィナヤを教える箇所 (Gnoli, p. 47, l. 3- p. 48, l. 15) を指すと考えられる。しかし、ウパーリが上座比丘達にヴィナヤを教えることになったのは、ブッダがヴィナヤを保持する者の利点について語ったことに由来する。従って、「上座比丘」という語が示すのは Gnoli 本 p. 44, l. 11- p. 48, l. 15 であるかもしれない。
 「獲得物と六〔群比丘〕」の原語は lābhaṣatkair であり、六群比丘と獲得物に関する箇所 (Gnoli, p. 51, ll. 10-20) を指すと考えられる。尚、Tib では「八人」(brgyad po dag) とされており (P. 179a5; D. 182a2), Skt と異なる。

の比丘達が会議堂⁵に参席し参座した時、以下の様な種類の会話と討議が起こった。「具寿方よ。私達は誰を恭敬し、尊敬し、敬い、供養すべきであろうか。そして、私達は誰に対して、挨拶し、お辞儀し、起立し、合掌と尊敬の作法を行うべきであろうか。私達の内、第一の座、第一の水、第一の施食を享受するに値するものは誰であろうか。」と。

そこにおいて、一方の者達が以下の様に語った。

「出家したシャーキャ族の者である。」と。

また、他方の者達が以下の様に語った。

「出家したバラモンの者である。」と。

或る者達は〔語った。〕

「それは出家したクシャトリヤの者である。」

或る者達は〔語った。〕

「それは出家したヴァイシュヤの者である。」

或る者達は〔語った。〕

「それは出家したシュードラの者である。」

或る者達は〔語った。〕

「低位でなく高位の家系から出家した者である。」

〔或る者達は語った。〕

「貧困でなく富裕な家系から出家した者である。」

或る者達は〔語った。〕

「美しく、見目麗しき、愛らしい者である。」

「言葉巧みで、言葉についての手段を具備する者である。」

「有名で、多大な福德を有する者である。」

「ストラ（経）を保持する者である。」

「ヴィナヤ（律）を保持する者である。」

「マートリカー（論）を保持する者である。」

「王家〔付き〕の上座である。⁶」

「(1)⁷ アランヤ〔に住する〕者である。」

「(2) 三衣を有する者である。」

「(3) フェルトの衣を纏う者である。」

⁵ 原語は upasthānaśālā である (Gnoli, p. 3, ll. 9-10)。Cf. BHSD, "hall of meeting (for monks)" p. 143b; Schopen, "the service hall" p. 101.

⁶ 原文では sthaviro rājanyaḥ (Gnoli, p. 3, l. 20) である。Tib は gnas brtan rgyal por 'os pa 「王に匹敵する上座(?)」 (P. 179b1; D. 187a6) とする。Schopen は "Royal Elder" と訳す (Schopen, p. 101; p. 140, note 1.9)。

⁷ この (1) から (12) まで番号を付した項目は、十二頭陀行である。同内容が『四分律』に「或有言阿蘭若者。或有言乞食者。或有言糞掃衣者。或有言作餘食法不食者。或有言一坐食者。或有言一搏食者。或有言塚間者。或有言露坐者。或有言樹下者。或有言常坐者。或有言隨坐者。或有言三衣者。(大正 22, p.939c)」とある。他、十二頭陀行の列挙はみられないが法臘についての言及は、『十誦律』では ŚAV 同様冒頭にみられる (大正 23, p.242a18-c25)。『パーリ律』でも十二頭陀行の列挙はみられない (Vinaya II, pp.161.7-17)。『五分律』では、法臘の語は見出せないが、分臥具人の制定の箇所「所差比丘應題臥具識在何處房。隨上座次分。(大正 22, 167c23-24)」としている。『摩訶僧祇律』では「或有比丘言。世尊子應受。有比丘言。世尊親里應受。復有言。世尊侍者應受。復有言阿羅漢應受。利利出家者言。利利應受。婆羅門出家者言。婆羅門應受。毘舍出家者言。毘舍應受。首陀羅出家者言。首陀羅應受。佛告諸比丘 汝等各各長慢故作是語。與世尊子乃至首陀羅。(大正 23, pp.445c22-446a6)」とある。

- 「(4) 糞掃衣の者である。」
 「(5) 乞食〔する〕者である。」
 「(6) 単一の座〔を使用する〕者である。」
 「(7) 非時に食さぬ者である。」
 「(8) 樹下〔に住する〕者である。」
 「(9) 死体の焼き場〔に住する〕者である。」
 「(10) 空き地〔に住する〕者である。」
 「(11) 〔眠る時に〕坐した姿勢をとる者である。」
 「(12) 〔施される〕ままの座に坐す者である。」
 「無常についての想いを得ている者である。」

–この間、〔仔細は〕前述の通り。–

「八解脱に入定する者である。」と。

或る者達は以下の様に語った。

「具寿方よ。私達全員の〔意見は〕同一ではない。というのも、取り決められたことが様々であるからである。この様な私達は、世尊のいらっしゃるところに近づき、近づいて後、世尊に以上の内容を質問申し上げよう。かの世尊が私達に解説なさる通りに、私達はそれを保持するとしよう。」さて、多くの比丘達は世尊の居られるところに近づいた。近づいて後、世尊の両足に頭でもって礼拝し、一方に坐した。一方に坐した多くの比丘達は、世尊に以下のことを語った。

[p. 4] 「大徳よ。今、私達多くの比丘達が会議堂に参席し参座した時、この以下の様な種類の会話と討議が起りました。–この間、前述の通り。–私達は世尊が解説される通りに、その通りに、そのことを保持致します。それ故、大徳よ。私達は、世尊に他ならぬ以下の内容を質問申し上げます。私達は誰を恭敬し、尊敬し、敬い、供養すべきでしょうか。–この間、前述の通り。⁸–第一の施食を享受するに〔値するのは誰でしょうか。〕」と。世尊は語った。

「比丘達よ。おまえ達が恭敬すべき、尊敬すべき、敬うべき、供養すべき、挨拶すべき、お辞儀すべき、起立すべき、合掌と尊敬の作法を行うべき相手は、より年長の者⁹である。そして、その者が、おまえ達の内、第一の座、第一の水、第一の施食を享受するに値する。」と。

世尊は語った。

「おまえ達が恭敬すべき、–この間、前述の通り。–第一の座を享受する〔に値する〕のは、より年長の比丘である。」と。

[p.4, l.13] *Old house-holders, etc., are not entitled to veneration*

比丘達は、年長の在家者達を恭敬し、尊敬し、敬い、供養した。〔それを〕聞いたので、バラモン達と長者達は、非難し、攻撃し、異論をとらえた。

⁸ ここで省略された内容は、本文中に訳した *kasya cāsmābhir abhivādanavandanapratyutthānānāmjalisāmīcīkarmakartavyam ? ko 'smākam arhati agrāsanam agrodakam* 「そして、私達は誰に対して、挨拶申し上げ、お辞儀し、起立し、合掌と尊敬の作法を行うべきであろうか。私達の内、第一の座、第一の水、... 値するのは誰であろうか。」(Gnoli, p. 3, ll. 12-14) という文章であると考えられる。

⁹ 原文では *vṛddhatarako* (Gnoli, p. 4, l. 7)。「より年長の者」とあり、「年長」の意味は「世尊は語った。『受戒した最初の年を質問すべきである』と。(bhagavān āha upasampadvarṣāgram praṣṭavyaṃ iti)」(Gnoli, p. 3, ll. 28-29)と後文にあるように、「受戒した年(時)を基準とした長幼」のことを指している。

「高貴な方々よ。私達は欲望を享受し、欲望の泥にまみれております。あなた方はどうして私達を恭敬するのですか。」比丘達はこの件を世尊に報告した。

世尊は語った。

「比丘達よ。私は出家した者達を意図して語ったのであって、在家者を〔意図したのでは〕ない。」と。比丘達は年長の〔仏教とは〕別の外道達を見たので、恭敬し、尊敬し、敬い、供養した。世尊は語った。

「私は、今、〔正しい〕法に従う者達を意図して語ったのであって、〔それ〕以外の者達を〔意図したのでは〕ない。」と。彼ら（＝比丘達）は年長になってから出家した沙弥達を見たので、恭敬し、尊敬し、敬い、供養した。世尊は語った。

「比丘達よ。私は〔具足戒を〕受けた者達を意図して語ったのであって、沙弥達を〔意図したのでは〕ない。」と。彼ら（＝比丘達）は年長であるが新参の〔具足戒を〕受けた者達を、恭敬し、尊敬し、敬い、供養した。世尊は語った。

「互いに最初の年を質問しあってから、礼拝すべきである。」

彼ら（＝比丘達）は質問はしていたが、生まれた年を語った。世尊は語った。

「受戒した最初の年¹⁰を質問すべきである。」と。比丘達は〈「最初の年」がどれ程なのか〉知らなかった。

世尊は語った。

「時季を告げるべきである。」比丘達は時季がどれ程なのか知らなかった。それ故、世尊は語った。

「比丘達よ。時季とは以下の五つ、〔すなわち、〕冬季、夏季、雨季、短い雨季¹¹、長い雨季¹²である。」と。

「それらの内、冬季は四ヶ月である。夏季は四ヶ月である。〈雨季は一ヶ月である。〉短い雨季は一昼夜である。長い雨季は三ヶ月から一夜を差し引いた〔期間〕である。以上の様に、時季を告げて後、先に〔具足戒を〕受戒した者を礼拝すべきである。「或る比丘達は四〔種類の〕者を礼拝すべきである。四〔種類の〕者とは誰か。[p. 5] 先ず、神と魔と梵天の世界の中の、沙門・バラモン達や神々と人間を含めた生類達にとっては、(1) 如来・阿羅漢・正等覚者・ブッダが礼拝されるべきである。全ての家住者達にとっては、(2) 出家者達が礼拝されるべきである。全ての具足戒を受けて者達にとっては、(3) 先に具足戒受けた者達が礼拝されるべきである。但し、比丘尼は除かれる。彼女（＝比丘尼）が具足戒を受けて百年経ていたとしても、今日、具足戒を受けた〔ばかりの〕比丘〔の方〕が礼拝されるべきである。具足戒を受けていない全て者達にとっては、(4) 具足戒を受けた者が礼拝されるべきである。十〔種類の〕者を礼拝すべきではない¹³。〈十とは〉誰か。(1) パリヴァーサ中の者 (parivāsika, (2) ムーラパリヴァーサ中の者 (mūlaparivāsika), (3) パリヴァーサに入った者 (pariyuṣita-parivāsa), (4) マーナーピヤ〔罪〕を

¹⁰ 原文では bhagavān āha upasampadvarṣāgrāṃ praṣṭavyaṃ iti (Gnoli, p. 3, ll. 28-29). これより、受戒を基準にした長幼に関する時季の数え方や他の条件が後続して説かれる。

¹¹ 原文では mṛ tavārṣikaṃ (Gnoli, p. 4, l. 32).

¹² 原文では dīrghavārṣikaṃ (Gnoli, p. 4, l. 32).

¹³ ここで礼拝すべきでない事例に挙げられるのは、僧残罪を犯した者である。罪を償っている比丘は、清浄な比丘から礼拝されるべきでない、或いは他の比丘が不在の住処で過ごしてはならないと行動も厳しく限定される。詳しくは、*Pudgalavastu* (Nalinaksha Dutt, ed., *Gilgit Manuscripts*, vol.III, part3, Sri Satguru Publications (Sinagar: 1943) (Delhi:1984), p.61ff がある。)

行う者 (mānāpyacārika), (5) マーナーピヤ [罪] を行った者 (caritamānāpya), (6) [正しい] 見解ではないものに陥った者 (adarśanāya-utkṣipta), (7) [誤ったことへの] 対抗措置をなさないことに陥った者 (apratikarmāya-utkṣipta), (8) 邪にして, [誤った] 見解に進み, [その] 放棄を欠くことに陥った者 (anīṣṭe pāpake dr̥ṣṭigate utkṣipta), (9) 全ての家住者, そして, (10) [具足戒を] 受戒していない者である。」世尊が, 年長の順に [敬われるべきこと] を取り決めた時, その時, 比丘達は互いを恭敬し, 尊敬し, 敬い, 供養した。彼ら (=比丘達) は, 互いに, 恭敬し, 尊敬し, 敬い, 供養しつつ, 善法に関して成長した。恰も, 池において蓮華が [成長する] 様に。疑問を生じた比丘達は, あらゆる疑問の破砕者である, 仏・世尊に質問した。

「大徳よ。ご覧になりましたか。世尊が年長の順に [敬うべきこと] を取り決めになられた時, その時, 比丘達は互いを恭敬し, 尊敬し, 敬い, 供養しました。彼ら (=比丘達) は互いに, 恭敬し, 尊敬し, 敬い, 供養しつつある内に, 善法により, 成長しました。恰も, 池において蓮華が [成長する] 様に。」と。世尊は語った。

「比丘達よ。ここにおいて, 今, 以下のことがどうして希有なることであろうか。貪欲から離れ, 瞋恚から離れ, 愚痴から離れ, 生と老と病と死と悲哀と悲嘆と苦悩と失望と迷乱に関して解放され, 全てを知り, 全ての種類を知り, 全ての知るべき知識を支配する私が, 年長の順ということを取り決めた故に, 年長の順であることを理解して, 比丘達は互いに, 恭敬し, 尊敬するのである。-この間, 前述の通り。-恰も, 池において蓮華が [成長する] 様に。」と。〔世尊は語った。〕
「しかし, 貪欲を有し, 瞋恚を有し, 愚痴を有し, 生と老と病と死と悲哀と悲嘆と苦悩と失望と迷乱に関して解放されておらず, [悪道に] 落下した身体を有する私が, 年長の順ということを取り決めた故に, 年長の順であることを理解して, ジャンブドゥヴィーパに住する全ての人々が, 後に, 三十三 [天] の神々の集団において再生したこと, そのことをおまえ達は聞くがよい。」

[p.5, l.30] *The story of the francoline, the hare, the monkey and the elephant*

昔のことだ。比丘達よ。カーシー [の諸地方] における一つの地方の中の或る深い森に, 四種類の生き物が暮らしていた。ウズラと兎と猿と象とである。[p. 6] そして, 彼らは, 互いに仲良く暮らし, 付き合い, 調和し, 挨拶しつつ, 争論せず, 疑わず, 望みのままに住することによって, 時を過ごしていた。

さて, ある時, 彼らには或る考えが浮かんだ。

“今, 私達は相互に, 仲良く暮らし, 付き合い, 調和し, 挨拶しつつ, 争論せずにいる。しかし, 私達は, 私達が誰を恭敬し, 尊敬し, 敬い, 供養すべきかを知らない。”と。

〔彼らは考えた。〕

“私達は年長の順を取り決めたらどうだろう。”と。

彼らは相互に語り合うことを開始した。

「私達の中で年長なのは誰か。」と。

それから, ウズラがバンヤン樹を見た。

「みなさん。バンヤン樹がどれくらいの背丈であるのを見ましたか。」

象が語った。

「私が多くの仲間と共に道を進んでいた時, これ (=バンヤン樹) がちょうど私の背丈の高さであるのを見ました。」と。

猿が語った。

「私がたくさんの仲間と共に道を進んでいた時、これがちょうど私の高さと同じであるのを見ました。」と。

彼らは語った。

「あなたがこの者（=象）より年長である。」と。

兎が語った。

「私も、双葉の頃のこれ（=バンヤン樹）の、他ならぬ双葉の上における諸々の雫を舌でなめました。」と。

彼らは語った。

「あなたは、更に、この二人より年長だ。」と。

ウズラが語った。

「あなた方よ。あの大きな背丈の形状を有するバンヤン樹が見えますか。」

彼らは語った。

「見えますよ。」

〔ウズラは続けて語った。〕

「あの〔樹の〕前の〔世代の〕諸々の果実を私が食べて後、この場所に糞をしました。それによって、これ（=今話題となっているバンヤン樹）が生えたのです。」と。

彼ら（象と猿と兎）は語った。

「それなら、あなた（ウズラ）が私達よりも年長だ。」と。

それから、象は全ての者達に恭敬することを開始した。猿は兎とウズラとを、兎はウズラだけを〔恭敬することを開始した〕。彼らが以上のように年長の順に恭敬しつつ、その深い森において、あちらこちらへ徘徊した。険しいあるいは谷深い場所の数々を進むべき時には、象には猿が乗り、猿には兎が乗り、兎に、更にウズラが乗った。

以上の様に、愛情が増大し、また、尊敬を伴った彼らには或る考えが浮かんだ。

“今、私達は愛情が増大し、また、尊敬を伴っている。そこで、更に別の何か善なることを保持して、行動してはどうだろう。”

〔また全員が考えた。〕

“何を行おうか。”

ウズラが語った。

「私達は、生き物に関する違反を慎もう。」

〔他の者達が語った。〕

「私達にとっての生き物に関する違反とはどのようなものだろう。」

ウズラが語った。

「草・花・果実の数々が存在するが、〔それらには〕生命を有しているものと生命を有していないものとが存在する。だから、私達は、今日より後、生命を有するものを放棄して、生命を有していないものを食べるべきだ。」

彼らは、生命を有するものを放棄して、生命を有していないものを食べることを開始した。

彼らは以下のことを考えた。

“今、私達は生き物に関する違反を慎んでいる。しかし、与えられぬものを取ることを慎んでいない。”

〔また全員が考えた。〕

“私達にとっての与えられぬものを取ることはどの様なものだろう。”

ウズラが語った。

「覆いを有する草・花・果実が存在し、覆いを有さないものが存在する。だから、私達は、今日より後、覆いを有するものを放棄し、覆いを有さないものを [p. 7] 食べるべきだ。」
彼らは覆いを有するものを放棄し、覆いを有さないものを食べることを開始した。

彼らは以下のことを考えた。

“今、私達は与えられぬものを取ることを慎んでいる。しかし、欲望に関する邪な行為を慎んでいない。私達は欲望に関する邪な行為を慎んでみてはどうだろうか。”

[また全員が考えた。]

“私達にとっての欲望に関する邪な行為とはどの様なものだろう。”

ウズラが語った。

「私達は、通うべき女性のところにも通うが、通うべきではない女性のところにも通っている。だから、私達は、今日より後、通うべき女性のところにのみ、通うべきで、通うべきではない女性のところに [通うべきでは] ない。」

彼らは通うべき女性のところに通い、通うべきでない女性のところに [通わ] なかった。

彼らは以下のことを考えた。

“今、私達は欲望に関する邪な行為を慎んでいる。しかし、誤った発言を慎んでいない。私達は誤った発言を慎んでみてはどうだろうか。”

[また全員が考えた。]

“私達にとっての誤った発言とはどの様なものだろう。”

ウズラが語った。

「私達は、あれやこれやを語っている。だから、私達は、今日より後、あれやこれや語るべきではない。繰り返し吟味してから、適時に、言葉を発するべきである。」

彼らは、あれやこれやを語ることなく、そうではなくして、繰り返し吟味してから、適時に従い、言葉を発した。

彼らは以下のことを考えた。

“今、私達は誤った発言を慎んでいる。しかし、お酒と酩酊する飲み物による昂揚の状態を慎んでいない。私達はお酒や酩酊する飲み物による昂揚の状態を慎んでみてはどうだろうか。”

[また全員が考えた。]

“私達にとってのお酒や酩酊する飲み物による昂揚の状態とはどの様なものだろう。”

ウズラが語った。

「昂揚する果実が存在するし、昂揚しないもの [も存在する]。私達は、だから、昂揚する果実を放棄し、昂揚しない果実を食べるべきだ。」

彼らは、昂揚する果実を放棄して、昂揚しない果実を食べることを開始した。

彼らが五つの誓戒の各々において確かに定着せしめられた時、ウズラが語った。

「みなさん。今、私達は五つの誓戒の各々において確かに定着しました。私達は、他の者達をも、五つの誓戒の各々において確かに定着させてみてはどうだろうか。」

彼らは語った。

「私達はそのようにしよう。」

[ウズラが語った。]

「あなた方の内、誰が [どんな者を] 確かに定着させることとするか。」

猿が語った。

「私は枝〔に住む〕野獣¹⁴全員を確かに定着させよう。」

次に、兎が語った。

「私は兎達と毛の長い野獣達全員を確かに定着させよう。」

象が語った。

「私は全ての象達とライオン達と虎達とヒョウ達全員を確かに定着させよう。」

ウズラが語った。

「もしも、それがそうなのであれば、簡潔に言って、あなた方にとって導かれない者達、一本足だろうが二本足だろうが四本足だろうが翼を有する者達だろうと、彼ら全員を私は五つの誓戒の各々において確かに定着させよう。」と。

[p. 8] それから彼らは、カーシ地方における、それら、あらん限りの動物となった生き物達全員を五つの誓戒の各々において確かに定着させた。彼らは互いに害することをなさず、その森の群落において、正しき思いに安住し、望みのままに暮らした。彼らの威力に基づき、天は適時において雨を有するものとなり、木々は常に花と果実を有し、大地は穀物を有した。

人間達は、彼らがお互いに害することなく暮らしており、木々は常に花と果実を有し、大地は穀物を有しているのを見た。王は語った。

「私は法に則って王権を行使している。この威力は私のものだ。」と。

後宮の者、王子達と大臣達、軍隊中最高の軍人、市民と国民達は語った。

「この威力は私達のものだ。」

王は考えた。

“これらの者達は全員、「私の威力である。私の威力である。」と語っている。〔しかし、〕それは判らない。誰の威力なのだろうか。”と。

彼(=王)は興味を生じて、占相師達を呼び寄せて後、質問したが、彼らも判らなかった。

さて、ヴァーラーナシーからほど遠くないところに遊園があり、そこに五神通を有する聖仙が住んでいた。〔その聖仙は〕ヴァーラーナシーの住人である人々全員にとって、供養され、敬われ、讃えられる人物であった。それから、王はその聖仙のもとに近づき、両足に平伏して後、語った。

「偉大な聖仙よ。私の領土において、それら、あらん限りの畜生となった生き物達が、お互い害することなく、正しい思いに安住して、望みのままに暮らしております。天は適時において雨を有するものとなり、木々は常に花と果実を有し、また、大地は穀物を有しております。それに基づき、私には以下の考えが生じました。“私は法に則って王権を行使している。〔だから、〕この威力は私のものだ。”と。〔また、〕後宮の者、王子達と大臣達、軍隊中最高の軍人、そして、市民達と国民達は〔以下の様に〕考えております。“この威力は私達のものだ。”と。〔しかし〕それは判りません。この威力は誰のものなののでしょうか。それ故、私には大きな興味が存在するので。あなたは疑問を破砕することがおできになる。この威力は誰のものなのですか。」と。

〔王は語った。〕

「彼らは何を保持し、行っているのですか。」

¹⁴ 原文では śākhāmr̥gān (Gnoli, p. 7, l. 25) である。Tib は spre'u 「猿」 (P. 182b2; D. 190b7) である。

〔聖仙は語った。〕

「五つの誓戒の各々である。」

〔王は語った。〕

「偉大な聖仙よ。五つの誓戒の各々とはどのようなものですか。」

〔聖仙は語った。〕

「大王よ。彼らは、生き物に対して命を取らず、他者の財産を強奪せず、行くべきでない者のところに行かず、誤った言葉を語らず、また、お酒を飲まないのだ。」

王は語った。

「偉大な聖仙よ。もしもそのようであれば、私もそれら五つの誓戒の各々を保持し、行いたいと思います。」

さて、その王は五つの誓戒の肢分を保持し行うことを開始した。王が五つの誓戒の各々を保持し行っていると〔聞いたので、〕妃達も五つの誓戒の各々を保持し行うことを開始した。王子達と大臣達と軍隊中最高の軍人と市民達と国民達も、五つの誓戒の各々を保持し行うことを開始した。近隣の [p. 9] 小王達は〔以下の様に〕聞いた。

「ブラフマダッタ王は、後宮の者と王子達と大臣達と軍隊中最高の軍人と市民達と国民達と共に、五つの誓戒の各々を保持し行っている。」と。

そして、〔そのことを〕聞いたので、今度は、彼ら（＝近隣の小王達）も、王子達と大臣達と軍隊中最高の軍人と市民達と国民達と共に、五つの誓戒の各々を保持し行うことを開始した。それ故、ついには、実に全ての人々が五つの誓戒の各々を保持し行うことを開始した。

さて、その時、ジャンブドゥヴィーパにおいて、死が訪れた者は身体が崩壊して後に、好ましい三十三〔天〕の神々の内に再生した。それから、神々の首長であるインドラは神の集団が満ち満ちているのを見たので、また、〔以下の〕偈を詠った。

「尊敬を有し、敬いを有する者達が苦行林において暮らしている。各々の世間を導いたのはウズラの梵行である。」と。

世尊は語った。

「比丘達よ。どう思うか。その時、その折りのそのウズラは、他ならぬ私であった。兎はシャールiptラ比丘、猿はマウドゥガルヤーヤナ比丘、象はアーナンダ〔比丘〕であった。その時にも、私が、年長の順を取り決めたことにより、〔彼らが〕年長の順を理解したので、ジャンブドゥヴィーパに住する人々全てが、ついには、三十三〔天〕の神々の集団の内に再生したのだ。現在も、私が年長の順を取り決めたことにより、年長の順を理解した後、比丘達は互いに尊敬し、恭敬し、敬い、供養しつつ、善法によって成長した。恰も、池における蓮華の様に。」¹⁵

¹⁵ 「法臘」に関する因縁譚を有するのは、『パーリ律』『四分律』『摩訶僧祇律』『十誦律』ŚAV である。その全てに、三匹の鳥獸（鳥あるいはウズラ・猿・象／ŚAV：ウズラ・猿・象・ウサギの四匹）が登場する過去世物語 *Tūtira-jātaka* が引用される。『パーリ律』以外の律文献では、登場する動物達を現在世のブツダが鳥（ウズラ）、舍利弗が猿、目蓮が象と配当している。しかし、『パーリ律』ではその配当は為されていない。ただ、物語の最後には、ウズラが猿と象に五戒を授けて、自らも五戒を受持したという記述がある（*Vinaya II*, p.162.11-12）。『五分律』では「臥具法」以外の「受戒法」に見られ、比丘達が互いに恭敬していない様を在家者から指摘されたことが因縁となっている。後続に「雑教二獸行十善業。…」とある（大正 22, p.121a2-25）。

[p.9, 1.20] *The Buddha eulogises the order by age*

「比丘達よ。それに基づき、その場合に、おまえ達は、梵行を有する者達に対して、上座達に対して、中位の者達に対して、新参の者達に対して、恭敬を伴い、敬いを伴い、恐怖の抑制を伴い暮らすべきである。それは何故かといえば。比丘達よ。先ずは、上座達に対して、中位の者達に対して、新参の者達に対して、恭敬を欠き、敬いを欠き、恐怖を抑制することを欠いて暮らしつつあるその比丘が、慣習的行為に応じたルールを完成させようとしても、その状態は存在しない。慣習的行為に応じたルールを完成することがなければ、諸学処のルールを完成させようとしても、その状態は存在しない。諸学処のルールを完成することがなければ、戒の集まり・三昧の集まり・智慧の集まり・解脱の集まり・解脱知見の集まりを完成させようとしても、その状態は存在しない。解脱知見の集まりを [p. 10] 完成することなく、得ることがなければ、涅槃に至ろうとしても、その状態は存在しない。

比丘達よ。先ずは、梵行をなす者達〔を含め〕、上座達に対して、中位の者達に対して、新参の者達に対して、恭敬を伴い、敬いを伴い、恐怖を抑制することを伴い暮らしつつあるその比丘が、慣習的行為に応じたルールを完成させようとするれば、その状態が存在する。慣習的行為に応じたルールを完成した後、諸学処のルールを完成させようとするれば、その状態が存在する。諸学処のルールを完成した後、戒の集まり・三昧の集まり・智慧の集まり・解脱の集まり・解脱知見の集まりを完成させようとするならば、その状態が存在する。解脱知見の集まりを完成した後、得て後、涅槃に至ろうとするならば、この状態が存在する。比丘達よ。そのことに基づき、その場合に、以下の様に学ぶべきである。すなわち、梵行を行う者達を含め、上座達、中位の者達、新参の者達に対して、恭敬を伴い、敬いを伴い、恐怖を抑制する者として暮らすべきである。比丘達よ。以上、その様に、おまえ達は学ぶべきである。」

[p.10, 1.13] *The Institution of vihāras*

世尊が五人の者を教導した時のことである。彼ら（＝五人）はアランヤに住していた。彼らがアランヤに住している内に、ライオン達と虎達とヒョウ達とハイエナ達¹⁶が寄りつくようになった。世尊は考えた。

“過去の正等覚者達の声聞達が考えていた住処とは何処におけるものであろうか。”

“ヴィハーラにおいてである”と世尊は知った。

神々も同じ様に世尊に報告した。

さて、その時、ヴァーラーナシーにカルヤーナバドラという名の長者が住んでいた。〔過去の〕善根によって目覚めた〔心の〕相続により、彼は以下のことを考えた。

“ああ、私は世尊の声聞達のヴィハーラを建立したいものだ。”と。

彼は早朝に起きて後、世尊の居られるところに近づいた。近づいて後、世尊の両足に頭でもって礼拝してから、一方に坐した。一方に坐したカルヤーナバドラ¹⁷長者に、世尊は法話でもって、

¹⁶ 原文では ta < ra > kṣūṇām (Gnoli, p. 10, ll. 15-16) であるが、Tib は chom rkun pa nmams kyi 「盗賊達の」 (P. 184a8; D. 192b7) としている。

¹⁷ 原文では kalyāṇābhadrīkaṃ (Gnoli, p. 10, ll. 24-25) という名になっている。ここより後にもしばしば、

教化し、鼓舞し、勇気づけ、喜ばせた。様々な種類の法話でもって教化し、鼓舞し、勇気づけ、喜ばせて後、〔世尊は〕沈黙した。

さて、カルヤーナバドラ長者は座から立ち上がると、上衣を片方の肩に掛けて後、世尊に合掌〔し〕、礼拝して、世尊に以下のことを語った。

「もしも世尊が許可されるなら、私は世尊の声聞達のヴィハーラを建立したいのですが。」と。世尊は語った。

「長者よ、それならば、私は許可しよう。建立するがよい。」と。

彼は、どの様なものを建立すべきか、ということを知らなかった。

世尊は語った。

「もしも、おまえが三つ部屋を有するもの¹⁸を建立するなら、中間に、香殿 (gandhakuṭi) を建立すべきであり、両脇に、二つの部屋を〔建立すべきである〕。三つの棟を有するもの¹⁹には、同様に、〔一つの棟に三つずつ、合計〕九つの部屋を〔建立すべきである〕。四つの棟を有するものには、中間に、門屋²⁰ (dvārakoṣṭhaka) に対面して、〔p. 11〕香殿を〔建立すべきであり〕、門屋の両脇に二つの部屋を〔建立すべきである〕。」と。

彼 (=カルヤーナバドラ) は、どれほどの階層²¹を建立するべきなのか、ということを知らなかった。世尊は語った。

「比丘達に対しては、五つの階層を有するヴィハーラの数々を建立すべきである。七つの階層を有する香殿を〔建立すべきである〕。七つの階層を有する屋上の夏用の部屋²²を〔建立すべきである〕。しかし、比丘尼達に対しては、三つの階層を有するヴィハーラの数々を建立するべきである。五つの階層を有する香殿を〔建立するべきである〕。五つの階層を有する屋上の夏用の部屋を〔建立するべきである〕。」と。

[p.11, l.6] *The story of Anāthapiṇḍada: his birth and wonders*

さて、その時、シュラーヴァステイーには、ダッタという名の長者が住んでいた。〔彼は〕富裕で、多大な財産を有し、多大な資産を有し、広大にして多大な富みを有し、ヴァイシュラヴァ

kalyāṇabhadra ではなく、kalyāṇabhadrika と記す箇所があるが、先に、kalyāṇabhadro nāma ... 「kalyāṇabhadra という名の...」 (Gnoli, p. 10, l. 20) とされていたので、kalyāṇabhadra に統一して訳す。また、祇園精舎布施の因縁譚に先行するヴィハーラ布施の因縁譚を伝えているのは、他に『パーリ律』『四分律』『五分律』『十誦律』がある。それらの相当箇所には、施主がラージャグリハの長者となっており個人名は出ない。詳しくは、拙稿「祇園精舎の奉納因縁譚—根本説一切有部律を中心として—」『仏教史学研究』47-1, 2004, pp.51-28 (L) にて述べた。

¹⁸ 原文では trilayanam (Gnoli, p. 10, l. 32) である。Schopen の指摘に従い、「部屋」と訳す。Cf. Schopen, p. 109; p. 153, note III.7.

¹⁹ 原文では trisāle (Gnoli, p. 10, l. 34) である。三つの建物がコの字形に並んだものが想像される。Schopen は "one with three sides" と訳す。Cf. Schopen, p. 109; p. 155, note III.9.

²⁰ 原文では dvārakoṣṭhaka- (Gnoli, p. 10, 34) である。Schopen は "entrance hall" と訳す。Cf. Schopen, p. 109; p. 1153, note III.9.

²¹ 原文では purāḥ (Gnoli, p. 11, l. 2) である。pura について、Schopen は Gernet の研究における訳 ("tages" あるいは "stories") を挙げて (Schopen, pp. 153-154, note III.10), "level" と訳している (Schopen, p. 109)。

²² 原文では bālāgrapotikāḥ (Gnoli, p. 11, l. 3) である。Cf. BHSD. "bālāgrapūtikā" (p. 399a); Schopen, "a summer room over the entrance" (p. 109; p. 154, note III.11).

ナほどの財産を蓄え、ヴァイシュラヴァナの財産に匹敵するほどであった²³。

彼(=ダッタ)に相応しい家系から、妻が迎えられた。彼は、彼女と共に、楽しみ、戯れ、喜び合った。彼が楽しみ、戯れ、喜び合いつつある間に、その間に²⁴、妻は懐妊した²⁵。そして、彼女は、八ないし九ヶ月が過ぎると出産し、男の子を生んだ。三七・二十一日間、様々に、生まれた彼に対して、誕生祭を行って後、命名がなされることになった。

「男の子の名をどうすべきか。」と。

親戚の者達が語った。

「この男の子は、ダッタ長者の息子である。だから、男の子の名は、スダッタとするのがよからう。」と²⁶。彼にスダッタという命名がなされた。

スダッタ少年は、八人の乳母に預けられた。その内、二人は〔彼を〕抱く乳母、二人は〔彼に〕乳をあたえる乳母、二人は〔彼の〕オムツの世話をする乳母、二人は〔彼の〕遊び相手をする乳母である。彼は、八人の乳母達によって、ミルク・サワーミルク・バター・チーズ・ヨーグルト、また、他の十分に火を通した特別な食べ物の数々によって、養育され、育てられた。恰も、池にある蓮華の如くに、速やかに成長したのである²⁷。

別の時、彼(=スダッタ)はあらゆる装飾品によって飾られ、乳母に抱かれ、坐って、外出した。〔すると、〕物乞いが〔スダッタの〕装飾品を所望した。

「若き御方。私は装飾品が欲しいのです。私に装飾品を布施して下さい。」と。

彼(=スダッタ)は、心を喜ばせ、その者に装飾品を布施した。彼(=スダッタ)は家に入った。すると、父親は彼(=スダッタ)の乳母に質問した。

「息子の装飾品は何処だ。」と。

一人の〔乳母〕が語った。

「ご息子が、[p. 12] 物乞いに布施なさいました。」と。

彼(=スダッタ)は別の装飾品によって飾られた。それ(=装飾品)もまた〔他人に〕布施された。再度また、〔スダッタは〕飾り付けられたが、それもまた布施された。その長者(=父親)は妻に語った。

²³ この文言... *nāma gr̥hapati prativasati ādhyo mahādhanō mahābhogo vistīrṇaviśālapariṅraho vaiśravaṇadhanasamudito vaiśravaṇadhanapratīparidhī* (Gnoli, p. 11, ll. 7-9) は、有部系文献に見られる定型句として指摘されている。cf. 平岡聡『説話の考古学』東京：大蔵出版、2002、pp. 154-155.

²⁴ 原文は *kālāntareṇa* (Gnoli, p. 11, l. 11) である。Tib は *dus gzhan zhig na* (P. 185a2; D. 193b3) である。

²⁵ この文言... *tena sadṛśāt kulāt kalatram ānītam; sa tayā sārđham kṛīdati ramate paricārayati; tasya kṛīdato ramamāṇasya paricārayataḥ ... patnī āpannasattvā samvṛtā* (Gnoli, p. 11, ll. 9-11) も、有部系文献に見られる定型句として指摘されている。cf. 平岡 [2002] , p. 157.

²⁶ ここにおける文言、すなわち、*tasya trīṇi saptakāny ekavimsatidivasān vistareṇa jātasyajātimaham kṛtvā nāmadheyam vyavasthāpyate; kim bhavatu dārakasya nāmeti; jñātaya ūcuḥ: ayam dāraḥ dattasya gr̥hapateḥ putras tasmād bhavatu dārakasya sudatta iti nāmeti*; (Gnoli, p. 11, ll. 12-16) も、父親の名と息子の固有名詞に関しては場面によって異なるが、有部系文献の定型句と指摘される。cf. 平岡 [2002] , pp. 161-162.

²⁷ ここにおける文言... *sudatto dāraḥo 'ṣṭābhyo dhātrībhyo dattaḥ; dvābhyām aṃsadhātrībhyām; dvābhyām kṣīradhātrībhyām; dvābhyām maladhātrībhyām; dvābhyām kṛīdanakābhyām dhātrībhyām; so 'ṣṭābhir dhātrībhir unnīyate vardhate kṣīreṇ adadhā navaṇītena sarpiṣā sarpirmaṇ ḍenānyaiś cottaptottaptair upakaraṇ aviṣeṣair āśu vardhate hradastham iva paṃkajam* (Gnoli, p. 11, ll. 17-22) も有部系文献に見られる定型句である。cf. 平岡 [2002] , pp. 162-163.

「おまえ。私達に生まれた息子は善良だ。常に布施を楽しんでいる。」と。
 彼女（＝妻）は語った。
 「あなた。もしそうであれば、私が、この者（＝スダッタ）を再び飾りましょう。」
 彼（＝ダッタ）は語った。
 「おまえ。確かに、私達には無量の黄金と財物の数々が存在する。しかし、装飾品を生み出すものなど存在しないのだから²⁸、一切、この者（＝スダッタ）を外に出すべきではない。」と。
 彼（＝スダッタ）は屋内のみで遊んでいた。
 さて、別の時、ダッタ長者は、召使いに取り巻かれて、アジーラヴァティー河に沐浴するため外出することにした。
 スダッタ少年は語った。
 「お父様。私も行きたいです。」と。
 彼（＝ダッタ）は、彼（＝スダッタ）をごまかすことを開始した。
 「息子よ。他ならぬここ（家）における水は浄らかだ。〔しかし、〕河は水性肉食動物でいっぱいだ。この乳母がおまえを沐浴させるであろう。」と。
 彼（＝スダッタ）は泣いてしまった。彼（＝スダッタ）の母は語った。
 「あなた。どうしてこの子は泣いているのですか。」と。
 彼（＝ダッタ）は事の次第を語った。彼女は語った。
 「あなた。彼（＝スダッタ）は、あなたと一緒に行くべきです。これについて反対がありませんか。〔あなたと一緒になら〕彼（＝スダッタ）は一層安全でありましょう。」と。
 彼（＝ダッタ）は彼（＝スダッタ）を連れて、河へ行行った。沐浴させられ、岸辺に坐らされた彼（＝スダッタ）は語った。
 「お父様。どうして私を監視なさるのですか。」
 [ダッタは語った。]
 「息子よ。おまえには過失があるからだ。なぜなら、おまえは貰った装飾品を、物乞い達に布施してしまうからだ。」
 [スダッタは語った。]
 「お父様は金品が欲しいのですか。」
 [ダッタは語った。]
 「息子よ。〔金品を〕欲しがらない者がいるか。」
 [スダッタは語った。]
 「お父様。もしそうであれば、私を〔河に〕入れてください。」彼（＝ダッタ）は彼（＝スダッタ）を〔河に〕入れた。それから、彼（＝スダッタ）が両手を河に浸すと、黄金で一杯の、四つの銅製の壺をつかみ上げた。彼（＝スダッタ）は語った。
 「お父様。今後、あなたは、望む限りで、財物によって財物の仕事を行って後、残った物を、他ならぬこの場所に浸してください。」
 [ダッタは語った。]
 「息子よ。おまえは、水中に存在する財宝を見る〔ことができる〕のか。」
 [スダッタは答えた。]

²⁸ 原文は kintu alaṃkāraḡaṭakā na santi (Gnoli, p. 12, ll. 5-6) である。Tib は rgyan brdung ba med pas ... (P. 185a7; D. 194a2) と訳す。

「お父様。水中に存在するものだけではありません。大地に存在するものであろうと、自身に属するものであろうと、自身に属するものでなかりと、遠くにおけるものであろうと、近くにおけるものであろうと、[見ることができます]。』

ダッタ長者は、驚き(vismaya)によって眼を見開いて、考えた。
“この様な財物の首長が、布施を与えることを可能とするのだ。”

以上の様に知ったので、語った。

「息子よ。もしそうであれば、おまえは望みのままに布施をなさい。」と。

実に、以下のことは決まり事である。その者の父親が活着している間、その間に、息子が名声を有することはない。

さて、或る時、ダッタ長者が死に、スダッタが家の所有者となった。彼は、身寄り無き者に常に施食をなした。それ故、周辺全てに名声が広まった。

「ダッタ長者の息子、スダッタが家の所有者と[p. 13]なった。彼は、身寄り無き者に常に施食をなしている。」と。彼に対して、アナータピンダダ(Anāthapiṇḍada)長者という呼び名が生じた。

それから、彼に相応しい家系から、妻が迎えられた。彼は、彼女と共に、楽しみ、戯れ、喜び合った。彼が楽しみ、戯れ、喜び合いつつある間に、息子が生まれた。同様に、七人の息子達が生まれた。彼(=アナータピンダダ)は、六人[の息子達]に対して、家庭を持たせた。七番目[の息子]はスジャータ(Sujāta)という名であった。[妻を娶る為に]彼(=スジャータ)に相応しい家系を彼(=アナータピンダダ)は探していた。[しかし、探すことが]できなかった。彼は、頬杖をついて、物思いに耽った。

[さて、]彼(=アナータピンダダ)にはマドウスカンダ(Madhuskandha)という友人のバラモン青年がいた。彼(=マドウスカンダ)は彼(=アナータピンダダ)がその様に物思いに耽っているのを見て、彼(=マドウスカンダ)は語った。

「長者よ。何故あなたは頬杖をついて、物思いに耽っているのか。」

彼(=アナータピンダダ)は答えた。

「私は、六人の息子達に[既に]家庭をもたせた。七番目の息子スジャータに相応しい家系を考えているのだ。この者(=スジャータ)に対して家庭を持たせる[べき]家系はどれなのか。」と。

彼(=マドウスカンダ)は語った。

「御懸念なさるな。この者(=スジャータ)に相応しき家系を、私が探し求めよう。」

[アナータピンダダは質問した。]

「何れの土地において[探し求めるの]か。」

彼(=マドウスカンダ)は答えた。

「私はマガダ(Magadha)の地まで行く。」

[アナータピンダダは語った。]

「そうしてくれ。」

彼(=マドウスカンダ)はラージャグリハ(Rājagṛha)へと出発した。ラージャグリハには、豊かで、財多く、富多く、アナータピンダダに匹敵する或る長者が[居た]。彼(=マドウスカンダ)は彼(=ラージャグリハの長者)の家に入ると、入り口の部屋の前に立って、呼びかけた。「ごきげんよう。ごきげんよう。」と。

彼（＝マドウスカンダ）に対して〔ラージャグリハの長者の〕家族達が語った。
 「バラモンよ。何をお望みでございますか。」
 [マドウスカンダは語った。]
 「女性という施しを〔望む〕。」
 [家族達は語った。]
 「何のためにですか。」
 [マドウスカンダは語った。]
 「シュラーヴァステイーにアナータピンダダという長者が居ますが、彼にはスジャータという名の息子がいるのだ。」
 彼等（＝家族達）は語った。
 「〔その方は〕私達の家に対応しい。しかし、〔その方の〕家から私達に対する結納の品（*sulka*）がたくさん〔要りますよ〕。」
 [マドウスカンダは語った。]
 「どれ程必要なのか。」
 [家族達は語った。]
 「馬が百頭、金貨が百枚、雌ラバの引く車が百輛、そしてカンボージャ出身の女性達が百人です。」と。

〔さて、〕バラモン青年であるマドウスカンダは、アナータピンダダ長者に、この事に関する手紙を届けさせた。また、彼（＝アナータピンダダ）は〔手紙を〕読み上げさせ終わると、「あなたは〔ラージャグリハの長者の家族の要求を〕受け入れよ。私はあらゆるものを与える。」と〔語った〕。その日の内に、〔要求が〕受け入れられた。

それから、彼等（＝ラージャグリハの長者の家族）によって、清浄で美味なるたくさんの食事によって満足させられたバラモン青年（＝マドウスカンダ）は、〔宿泊する為の〕邸宅に行つて後、部屋に至ると、身体の上下からの排泄に悩まされた。バラモン達は、〔その病気に〕不慣れであった。彼等（ラージャグリハの長者の家族）は、不浄に対する恐れのために、彼（＝マドウスカンダ）を外に放り出した。

偶然に、シャーリプトラ（*Śāriputra*）具寿とマウドウガルヤーヤナ（*Maudgalyāyana*）具寿がその場所にやつて来た。彼等（＝二人の具寿）は彼（＝マドウスカンダ）を見た。そこで、彼等二人（＝二人の具寿）は、竹の棘でもって引っかき、〔彼を〕白い石灰質の土でもって盛り、〔その後〕沐浴させた。〔そして、〕他ならぬ彼（＝マドウスカンダ）に対して法を説いて後、〔二人の具寿は〕立ち去つた。〔しかし〕彼（＝マドウスカンダ）の下痢は止まなかつた。彼（＝マドウスカンダ）は二人に対して、心を清浄にして後、死んだ。〔死んで後、マドウスカンダは〕四大王天衆の内に再生した。彼（＝マドウスカンダ）はヴァイシュラヴァナ大王のもとに行つて、宮殿を乞い求めた。

彼（＝ヴァイシュラヴァナ）は語つた。
 「行け。おまえにとって、そのシヴィカドゥヴァーラ（*Śivikadvāra*）こそが宮殿である。」と。彼はそこに行くと、〔その場所の〕住人となつた。

[p. 14]〔さて〕ヴィデーハ国王は、ビンビスーラ（*Bimbisāra*）王に対して、ヒマヴァット（*Himavat*）に住する百頭の象を与えた。その王（＝ビンビスーラ）は、コーサラの〔王〕プラ

セーナジット (Presenajit) に対して〔以下の様に〕伝えた。

「私に対して、ヴィデーハ王によりヒマヴァットに住する百頭の象が贈られた。もしも、欲しいなら、あなたは〔私に〕請うがよい。」と。

〔さて、〕アナータピンダダ長者は、コーサラの〔王〕プラセーナジットが居るところに近づいた。近づくと、コーサラの王プラセーナジットに以下の様に語った。

「陛下。私にはラージャグリハに或る所用がございます。そこに行行って後、戻って参りましょう。」と。

王は語った。「よろしい。行くがいい。私にも、そこから百頭の象を連れて来ねばならない〔という所用がある〕。おまえはそれを連れてきてくれるだろうね。」と。

長者は答えた。

「陛下。もしも私にとって、そこに所用のもの（目的のもの）があれば、私は〔それらを〕得られるでしょう。ここに戻って後、陛下のお心をつかむことができるでしょう。」と。

王は語った。

「よろしい。その様にせよ。」と。

[p.14, l.12] *Anāthapiṇḍada meets the Buddha*

そうして、長者は家からの多くの結納の品を携えて、ラージャグリハへ出発した。彼（＝アナータピンダダ）は、或る長者（＝ラージャグリハの長者）の家の中の部屋に入ったが、その長者（＝ラージャグリハの長者）は夜中に起きて、家族に告げた。

「おきなさい。おまえ達。おきなさい。そなた達は、薪を割りなさい。おまえ達は〔薪の〕集まりを燃やしなさい。おまえ達は食べ物を料理しなさい。おまえ達はスープを料理しなさい。おまえ達は柔らかい食べ物をかき回しなさい。おまえ達は食堂に明かりを灯しなさい。」と。

その時、アナータピンダダ長者は、以下の様に考えた。

“この長者（＝ラージャグリハの長者）は、嫁を迎えるのだろうか、あるいは、嫁を送り出すのだろうか。あるいは、この食事によって、国中の人が招待されるのだろうか。商人か、それとも、市民か、それとも、聴衆か、それとも、マガダ〔国の〕シュレーンヤ・ビンビサーラ王を、この食事でもって招待するのだろうか。” 以上の様に考えたので、その長者（＝ラージャグリハの長者）に、以下の様に語った。

「長者よ。あなたは、嫁を迎えること、あるいは、嫁を送り出すことをなすのか。あるいは、あなたは国中の人を食事でもって招待するのか。それとも、商人か、それとも、市民か、それとも、聴衆か、それとも、マガダの王シュレーンヤ・ビンビサーラを食事でもって招待なさるのか。」と。

彼（＝ラージャグリハの長者）は語った。

「長者よ。私は、嫁を迎えることをなすのではなく、嫁を送り出すことをなすのでもない。また、私は、国中の人を食 303 事でもって招待するのではなく、商人を、あるいは、市民を、あるいは、聴衆を、あるいは、マガダ国の王シュレーンヤ・ビンビサーラ王を食事でもって招待するのでもない。そうではなくて、ブツダを上首とする比丘サンガを食事でもって招待するのである。」と。

ブツダという、以前に聞いたことがない音声聞いたので、アナータピンダダ長者の毛穴すべてが震えた。毛穴が震えた彼は、彼の長者（＝ラージャグリハの長者）に、以下の様に語った。

「長者よ。このブツダという名前の方はどなたか。」

〔ラージャグリハの長者は語った。〕

「長者よ。沙門 [p. 15] ガウタマである。彼はシャーキャ族の息子にして、シャーキャ族の家系から髪の毛と髭とを落とし、カーシャーヤ色の〔三〕衣を身に纏って、実に正しく、信仰によって、家から家無き状態へと出家し、この上なき等正覚を得たのである。長者よ。以上の彼が、ブッダという名のものである。」

〔アナータピンダダ長者は語った。〕

「サンガという名前の方は誰か。」

〔ラージャグリハの長者は語った。〕

「長者よ。クシャトリヤの家系からさえも、〔その〕家系の息子達が、髪と髭を落として、カーシャーヤ色の〔三〕衣を身に纏って、実に正しく、信仰によって、かの出家した世尊に従って出家したのである。バラモンの家系からも、ヴァイシャの家系からも、シュードラの家系からも、諸々の家系の息子達が、髪と髭を落として、カーシャーヤ色の〔三〕衣を身に纏って、実に正しく、信仰によって、かの出家した世尊に従って出家したのである。長者よ。以上のそれ〔ら〕が、サンガという名前のものである。私は、ブッダを上首とするその比丘サンガを、家内において食事でもって招待するのである。」

〔アナータピンダダ長者は語った。〕

「長者よ。その世尊は、今どこに住しておられるのか。」

〔ラージャグリハの長者は語った。〕

「このラージャグリハの中の、シータヴァナ (śītavana) の中の、死体焼き場に〔居られる〕。」

〔アナータピンダダ長者は語った。〕

「長者よ。私達は、その世尊にお会いすることができるのだろうか。」

〔ラージャグリハの長者は語った。〕

「長者よ。それならば、まず、あなたは来なさい。」〔と。〕

〔ラージャグリハの長者はアナータピンダダを接待場所に案内して後、語った。〕

「今、あなたが来たここが〔ブッダのための〕接待場所である。〔ここにおいて、〕明日、あなたは〔ブッダに〕お会いできるだろう。」

アナータピンダダ長者は、その夜に、ブッダを対象とする想起を伴い、眠りに入った。彼 (= アナータピンダダ) は、夜明け前なのに、夜明けだと勘違いして、シヴィカ・ドウヴァーラの有る場所に近づいた。

その時、シヴィカ・ドウヴァーラは、夜における二つの夜の期間、すなわち、上半 (深夜) と下半 (暁) の間、開いていた。「どうか、行ったり来たりする使者達の妨げがなきようにしてください。」と〔言われたからである〕。

さて、シヴィカ・ドウヴァーラが開いており、また、光によって明るくなっているのを見た彼 (= アナータピンダダ) は以下の様に考えた。

“夜が明けたのだろうか。また、シヴィカ・ドウヴァーラが開いたままである。” 以上の様に考えたので、他ならぬその光とともに街から出た。そして、彼 (= アナータピンダダ) が出発した直後、光っているものは消滅し、〔再び〕闇があらわれた。それ故、〔アナータピンダダには〕恐怖が起こり、〔身体は〕硬直し、毛が逆立った。

“ああどうか、人間、あるいは、人間にあらざる者、あるいは、盗賊が害しようとしませんように。さもなくば、たくさんの結納の品が不足することになるだろう。”

以上の様に考えて、引き返そうと望んだ彼 (= アナータピンダダ) は、天子マドゥスカンダの台座を右繞し、また、敬礼した。一方、天子マドゥスカンダは以下の様に考えた。

“今こそ、アナータピンダダ長者によって、正しき見解がなされるべきである。今〔のまま〕では、この者（＝アナータピンダダ）は、仏・世尊を捨て去って、他の神に敬礼することになる。”以上の様に考えて、シヴィカ・ドウヴァーラの周辺、シータヴァナの周辺、焼き場、その間で、多量の光でもって照らして、アナータピンダダ長者に以下のことを語った。
「長者よ。前進せよ。後退してはいけない。前進により、おまえには幸福がある。後退により〔幸福は〕ない。なぜなら。

[p. 16] 百頭の馬達、百の金の装飾品、百頭のラバが引く車輛、また、百頭の種馬と種々の宝石でもって飾られた戦車、〔それらはブツダの居場所へ〕行進する者の一步の十六分の一に値しない。

前進せよ。長者よ。後退してはならない。前進によりおまえには幸福がある、後退により〔幸福は〕ない。それはなぜかといえば、

ヒマヴァットに住する百頭の象達、黄金と宝石を身につけたもの達、力強い歯を有する大集団、鎧を身につけたマータンガ出身のもの達²⁹、〔それらはブツダの居場所へ〕行進する者の一步の十六分の一に値しない。

長者よ。前進せよ。後退してはならない。前進によりおまえには幸福がある、後退により〔幸福は〕ない。それはなぜかといえば、

宝石のついた耳飾りを身につけた百人のカーンボージャ出身の女達、金の腕飾りを保持する、首の回りに黄金の飾りを身につけ、よく飾りつけられた〔女性達〕。〔それらはブツダの居場所へ〕行進する者の一步の十六分の一に値しない。

長者よ。前進せよ。後退してはならない。前進によりおまえには幸福がある、後退により〔幸福は〕ない。³⁰

アナータピンダダ長者は天子に以下の様に語った。

「素晴らしい方よ。あなたは誰なのですか。」

〔天子マドウスカンダは語った。〕

「長者よ。私は、他ならぬおまえの昔の友人である、バラモン青年マドウスカンダである。この私は、シャーリプトラとマウドウガルヤーヤナの二人のもとで、心を浄らかにして後、死んだ。その後、四大王天衆の内に再生し、そして、このシヴィカ・ドウヴァーラを宮殿としてやって来たのだ。だから、お前に語ったのだ。『長者よ。前進せよ、後退してはならない。前進によりおまえには幸福がある、後退により〔幸福は〕ない。』〔と〕」

そこで、アナータピンダダ長者は以下の様に考えた。

“すばらしい。仏・世尊は、勝れていないものはずはないのであろう。〔彼が〕法を説くという事は、〔彼が〕勝れていないものはずはない〔のであろう〕。それに対して、神すらも、称え、喜ぶのだ〔から〕。”

以上の様に考えたので、〔アナータピンダダは〕シータヴァナと〔その中の死体〕焼き場の有る場所に近づいた。

²⁹ Dutt 本では mahāgajāḥ (p.140, l.18) とあるが、GBM でも mātangajāḥ (GBM6.942.9) とあり、Gnoli 本に同じ。

³⁰ GBM では、ptatikrāmataḥの語で終わる (6.942.10)。

その時、世尊はヴィハラの外の、見通しのよいところにある、経行処において、経行をなしていた。その〔行為の〕大部分は、アナータピンダダ長者を探しつつ〔であった〕。〔一方、〕アナータピンダダ長者は、遠くから世尊を眺めた。そして、眺めて後、世尊の居られるところに近づいた。近づくと、世尊に友好の挨拶でもって挨拶した。「世尊よ、安穩に眠られましたか。」すると世尊はその時に以下の偈を語った。

「実に、あらゆる場合に、清らかにして寂靜である者は、安穩に臥すものである。[p. 17]〔諸欲から〕顔を背け、〔輪廻の〕根源 (nirupadhi) を欠く者は、諸々の欲望によって取り付かれない。この世において、あらゆる期待を³¹切断し、心における高揚を排除して、寂靜に至った心とともに、寂靜である者は安穩に臥すものである。」

さて、世尊はアナータピンダダ長者を伴って、ヴィハラに入り、準備されたばかりの座に坐した。アナータピンダダ長者は世尊の両足に頭でもって礼拝し、一方に坐った。一方に坐したアナータピンダダ長者を、世尊は法話でもって教化し、鼓舞し、勇気づけ、喜ばせた。

仏・世尊達にとって、死に先立ちなすべき法話というのは、すなわち、布施についての話（施論）、戒についての話（戒論）、天についての話（生天論）である。

諸々の欲望が持つ味・不幸・苦悩を浄化し脱し離れている者（＝ブッダ）は、利益と清浄性に関係する諸々の法を詳細に説き示した。世尊は、彼（＝アナータピンダダ）が、喜んだ心・善なる心・歓んだ心・障害なき心を有し、〔法の教示を受けるのに〕適切であり、〔法の教示を受ける〕力を有しており、素晴らしい法の教示を理解し得ることを知った。

その時、〔ブッダは、〕仏・世尊達にとっての以下の様な素晴らしい法の教示、すなわち、苦・集・滅・道という四つの聖なる真実（四聖諦）を、詳しく開示した。その時、他ならぬその座に坐したアナータピンダダ長者は、四つの聖なる真実を現観した。すなわち、苦・集・滅・道が〔理解された〕。あたかも、〔汚れ〕を洗い流され、〔汚れた〕色をうち捨て、染色されようとする清らかな布が、実に正しく、色を得る様に、全くその様に、その座に坐ったアナータピンダダ長者は、四つの聖なる真理を現観した。すなわち、苦・集・滅・道が〔理解された〕。

その時、アナータピンダダ長者は、法を見、法を得、法を知り、法を吟味し、欲望から脱し、疑念から脱し、他をよりどころとせず、他を指針とせず、師の教えにおける諸々の法に関して、熟達を得ると、座から立ち上がり、上衣を一方の肩に掛けて、世尊の居られるところに合掌礼拝し、世尊に以下の様に語った。

「私は理解致しました。大徳よ。〔私は〕理解致しました。この私は、世尊に帰依致します。法と比丘サンガとに〔帰依致します〕。私を優婆塞として受け入れてください。今より以後、命の限り、息のある〔限り〕、帰依と浄信とを〔致します〕。」

すると、世尊はアナータピンダダ長者に以下の様に語った。

「長者よ、お前はなんという名であるか。」

〔アナータピンダダは語った。〕

「大徳よ。私はスダッタと申します。また、私は身寄りなき者達に布施を与えます。それで、私を『アナータピンダダ (Anāthapiṇḍada: 身寄り無き者に食を与える) 長者である。』・『アナータ

³¹ 原文では āśaktin 「能力」 (Gnoli, p. 17, l. 2) であるが、この文脈では意味が不明瞭である。Schopen は、āsāstim と読んでいる (p. 165, note VI.29)。Tib は re ba (P. 188b2; D. 197a6) とするので、Schopen の読みと合致する。ここでは、Schopen の読みを採用して訳す。

ピンダダ長者である。』と人々は呼んでおります。」

〔ブッダは語った。〕

「長者よ。お前は何処の者なのか。」

〔アナータピンダダは語った。〕

「[p. 18] 大徳よ。東方の国々の中で、コーサラの〔諸都市の〕内のシュラーヴァステイーという名の都市がございます。私はそこに住しております。」

[p.18, 1.3] *Anāthapiṇḍada invites the Buddha to Śrāvastī*

「世尊よ。シュラーヴァステイーにいらして下さい。私は、命の限り、衣・鉢・臥坐具・病気の際の医薬品という〔四つの〕必需品でもって、世尊にそして比丘サンガとにお伝えしたいのです。」

〔ブッダは語った。〕

「長者よ。シュラーヴァステイーには複数のヴィハーラが存在するか。」

〔アナータピンダダは語った。〕

「いいえ。大徳よ。」

〔ブッダは語った。〕

「長者よ。複数のヴィハーラが存在する場所、その場所に、来るべきであり、行くべきであり、留まるべきであると比丘達は考えている。」

〔アナータピンダダは語った。〕

「世尊は、お越し下さい。私は、〔仰る〕通りに〔ヴィハーラを〕建立致しましょう。シュラーヴァステイーには複数のヴィハーラが存在することになるでしょうから、また、比丘方は〔シュラーヴァステイーに〕来るべき、行くべき、住すべきであるとお考えになる〔はずです。〕と。」

世尊は沈黙でもって、アナータピンダダ長者〔の申し出〕を了承した。アナータピンダダは、世尊の沈黙による了承を知って、世尊の両足に頭でもって礼拝して後、世尊のもとから立ち去った。

それから、彼にとってラージャグリハでの仕事や責務、それら全てをなし終え、済ませると、再び世尊の居られるところに近づいた。近づくと、世尊の両足に頭でもって礼拝して、一方に坐した。一方に坐したアナータピンダダ長者は、世尊に以下の様に語った。

「世尊よ。私の同伴者として、比丘お一人をお与え下さい。その同伴者の方とともに、世尊のために、シュラーヴァステイーにヴィハーラを建立しますのです。」と。

世尊は考えた。

「眷属を伴うアナータピンダダ長者を、そして、シュラーヴァステイーの住人達や群衆を随順させ得る〔力を有する〕のは (vidheyah) 誰であろうか。」彼 (=世尊) は、それがシャーリプトラという比丘であると知った。そこにおいて、世尊はシャーリプトラ具寿に告げた。

「シャーリプトラよ。眷属を伴うアナータピンダダ長者、シュラーヴァステイーの住人、そして群衆を観察しなさい (samanāhara)。」と。

シャーリプトラ具寿は世尊に対して沈黙でもって了承した。さて、シャーリプトラ具寿は、世尊の両足に頭でもって礼拝して後、世尊のもとから立ち去った。³²

³² これ以降に展開される祇園精舎の布施に関連して出家者が派遣される事例は諸律文献の臥坐具韃度でも『十誦律』『摩訶僧祇律』『五分律』SAVである。詳しくは、拙稿 [2002]。

[p.18, 1.26] *Śāriputra leaves for Śrāvastī*

さて、シャーリプトラ具寿は、他ならぬその夜が過ぎると、明け方に起きて、衣鉢を携え、ラージャグリハに乞食のために入った。ラージャグリハを乞食のために歩きまわって後、食事の作法をなした。その後、食事を終えた鉢（鉢盂）をしまつて、使用されたままの臥坐具をしまつて後、衣鉢を携え、シュラーヴァスティーの地へ、遊行へと立ち去った。

一方、アナータピンダダ長者はたくさんの旅行道具を手に入れると、一昼夜をかけてシュラーヴァスティーに到着した。彼（＝アナータピンダダ）はちょうどシュラーヴァスティーに入りつつある時に、アーラーマを通してアーラーマへ、遊園³³を通して遊園へ、園林³⁴を通して園林へ、経行処を経行しつつ、吟味しながら以下の様に語った。

「その土地は何処となるのであろうか。〔すなわち、〕シュラーヴァスティーから遠過ぎず [p. 19] 近過ぎず、日中は人の往来が少なく、喧噪が少なく、夜中には音声が多く、鳴き声が多く、アブ・毒虫・風・熱・爬行動物による接触が少ない、その場所において、私が世尊のためにヴィハーラを建立させるのであろう〔場所は何処となるのであろうか。〕」と。

アナータピンダダ長者は〔以下の様に〕見た。〔すなわち、〕ジェータ王子のアーラーマは、シュラーヴァスティーから遠過ぎず、近過ぎず、日中には、人の往来が少なく、夜中には、音声が多く、鳴き声が多く、アブ・毒虫・風・熱・爬行動物による接触が〈少ない〉と。見おわると、更に、彼は以下の様に考えた。

“ここに、私は世尊のためにヴィハーラを建立させよう。”と。

彼は自らの家に入ると直ぐに、ジェータ王子の居るところに近づいた。近づくと、ジェータ王子に以下の様に語った。

「王子よ。私にアーラーマをお与えください。私はそこに世尊のためにヴィハーラを建立致します。」と。

彼（＝ジェータ）は語った。

「長者よ。だめだ。あのアーラーマは私のものだ。また、あの遊園〔も〕私のものだ。」

二度めも三度めも、アナータピンダダ長者はジェータ王子に以下の様に語った。

「王子よ。私にアーラーマを与えてください。私はそこに世尊のためにヴィハーラを建立させていただきます。」と。

〔ジェータは語った。〕

「〈長者よ。〉 1 コーティを敷き詰めても与えないぞ。」

更に、アナータピンダダ長者はジェータ王子に以下の様に語った。

「王子よ。アーラーマの値段を付けて下さい。金貨を要求して下さい。」

〔ジェータは語った。〕

「私のアーラーマだぞ。誰が値段を付けるのか。おまえが値踏みするのか。」

二人は値段を付け〔ようとし〕たが、値段を付けられなかった。それ故、二人は論争に陥った。

彼ら（＝ジェータとアナータピンダダ）は商業に携わる者達のところに出かけた。

³³ 原語は、udyāna である (Gnoli, p. 18, l. 33)。Dutt 本には、この語の前に「林を通して林へ (vanato vanam)」とある (Dutt, p.144.1.18)。

³⁴ 原語は、upavana である (Gnoli, p. 18, l. 34)。

ここまでの間に、四天王は (caturṅām lokapālānām) 以下の様に考えた。
 “このアナータピンダダ長者は世尊のためにヴィハハラを建立させようとしている。私がこの者の介助者となるとしよう。”と。それから、商業を携わる者に自らを化現して、〔その〕主旨についての法廷の場に坐した。

アナータピンダダ長者とジェータ王子は、商業の場所に行った。そうして、アナータピンダダ長者は、商業を携わる者達に対して、以上の主旨を詳細に述べた。〔すると〕彼等は語った。
 「王子よ。あなたがアーラーマの値段をお付けなさい。金貨を要求なさい。〔金貨を支払えば、〕アーラーマは長者のものです。」と。
 彼 (=王子) は黙ったままだった。

〔一方、〕アナータピンダダ長者は諸々の車・荷・籠・箱・駱駝・牛・ロバでもって、たくさん金貨を持ち出すと、その全てをジェータヴァナに、敷き詰め始めた。〔しかし、〕十分ではなかった。或る土地区画は敷き詰められてはいなかった。それから、アナータピンダダ長者は以下のことを思い巡らしつつ、しばらく沈黙したままだった。
 「この敷き詰められていない土地区画に敷き詰めるのに過不足無き財物〔の分量は〕はいかほどになるのか。しかし、更に〔財物を〕求めることはできないであろう。」

ジェータ王子は考えた。
 “アナータピンダダ長者は〔以下の様に〕後悔している。『アーラーマの為に、何故、私はこれほどたくさんの財物の集まりを布施しようとするのか。』”と。

以上の様に考えたので、〔ジェータは〕アナータピンダダ長者に以下の様に [p. 20] 語った。
 「長者よ。もしも、今、おまえが後悔していれば、金貨を要求せよ。〔そうすれば、この〕アーラーマは私のものである。」
 〔アナータピンダダは語った。〕

「いいえ。王子よ。私は後悔しておりません。そうではなくて、私はまさに以下のことを案じて、しばし沈黙していたのです。〔すなわち、〕この敷き詰められていない土地区画に敷き詰めるのに過不足無き財物〔の分量は〕はいかほどになるのか。しかし、更に〔財物を〕求めることはできないであろう。」と。

そこで、ジェータ王子は以下の様に考えた。
 “ああ、世尊は勝れていないものはずはないであろう。法を説くということは勝れていないものではない〔であろう〕。それに対して、今、この長者はアーラーマのために、これほどたくさんの財物の集まりを布施している〔のであるから〕。”

以上の様に考えたので、〔ジェータは〕アナータピンダダ長者に以下の様に語った。
 「長者よ。敷き詰められてない土地区画を私に与えよ。この場所に、私が世尊のために門屋³⁵を建立させよう。」アナータピンダダ長者はジェータ王子に敷き詰められていない土地区画を与えた。そこに、ジェータ王子は世尊のために門屋を建築させた。

³⁵ 原文では dvārakoṣṭhakam である (Gnoli, p. 20, l. 10)。

[p.20, l.14] *Obstruction by Tīrthyas*

さて、「アナータピンダダ長者は世尊のためにヴィハーラを建立させることを開始した。」と〔聞いて³⁶〕、心が激しい怒りに満たされた彼ら外道達³⁷は集まり、アナータピンダダ長者の居るところに近づいた。近づくと、〔彼等は〕語った。

「長者よ。おまえは沙門ガウタマのためにヴィハーラを建立してはならない。」

〔アナータピンダダは語った。〕

「どうしてですか。³⁸」

〔外道達は語った。〕

「諸々の都市は私たちによって〔既に〕享受されている。沙門ガウタマにはラージャグリハがある。シュラーヴァスティーは私たちのものである。」

彼（＝アナータピンダダ長者）は語った。

「あなた方によって、諸々の都市は〔既に〕享受されている。しかし、〔この場所は〕私自身の自らの財であります。喜びの対象である人物の法の集まりに対して建立をしたいのです。」と。

彼等（＝外道達）は王のもとに行った。そこにおいても、アナータピンダダは勝利した。厚顔な外道達は主張を翻さず、語った。

「長者よ。我々はおまえの自由にはさせないぞ。沙門の高弟が来ているな。その者が、もしも我々を議論によって打ち負かすなら、〔おまえは〕ヴィハーラを建立するがいい。」と。

彼（アナータピンダダ長者）は答えた。

「ようございます。まずは、聖者シャーリプトラに伺いましょう。」と。

さて、アナータピンダダ長者はシャーリプトラ具寿の居るところに近づいた。近づくと、シャーリプトラ具寿の両足に頭でもって礼拝し、一方に坐した。一方に坐して後、アナータピンダダ長者はシャーリプトラ具寿に以下の様に申し上げた。

「大徳シャーリプトラよ。外道達は以下の様に言いました。『長者よ。おまえの自由にはさせない。沙門ガウタマの高弟が来ているな。その者が、もしも我々を議論によって打ち負かすなら、〔おまえは〕ヴィハーラを建立するがいい。』と。これについて、同意すべきでしょうか。」と。

シャーリプトラ具寿は考えた。

“これらの者達（＝外道達）には善根は全く無いのだろうか。それとも、有るのだろうか。”と。彼（＝シャーリプトラ）は〔以下の様に〕知った。“〔善根は〕存在する。”“〔その善根は〕誰のもとに結びついているのだろうか。”“他ならぬ私の〔もとに結びついて〕いる。”“私の〔もとに〕結びついており、教導すべきなのはこれらの者達のみなのだろうか。それとも、弁論でもって教導すべき他の者達もまた存在するのだろうか。”と。

彼（＝シャーリプトラ）は〔以下の様に〕知った。“存在する。”“どれほどの間に、[p. 21] 彼等は集まって来るだろうか。”

³⁶ 原文では *iti* の後には何も語が存在しないので補った。Schopen は *saying "...*” 「言いつつ」 (Schopen, p. 118, l. 37) を補うが、世尊を敵とみなす外道が語る直接話法の中に「世尊」という語が入るのは不自然に思われる。

³⁷ 原文では *tīrthyās* である (Gnoli, p. 20, l. 16)。

³⁸ 原文では *kiṃ kāraṇam ?* (Gnoli, p. 20, l. 19) である。Schopen は MSV におけるこの表現は話者の自問自答ではないとする (Schopen, p. 175, note IX.3)。ここでは Schopen の指摘に従う。

彼（＝シャーリプトラ）は〔以下の様に〕知った。

“七日後である”と。

彼（＝シャーリプトラ）は精神を集中してから語った。

「長者よ。その様（＝同意すること）にせよ。しかし、〔今から〕七日目においてである。」

そこで、アナータピンダダ長者は喜びと歓喜を生じて、外道達の居るところに近づいた。近づいて、〔アナータピンダダは〕外道達に以下の様に語った。

「大徳である聖者シャーリプトラはおっしゃいました。『よろしい。その様にせよ。しかし、〔今から〕七日目においてである』と。

彼等（＝外道達）は考えた。

“これ（＝七日後とすること）に関して、二つの理由を考えるべきである。逃げようとするためか、あるいは、仲間を探そうと望むためである。〔そうでなければ、〕これに関して、適時とするのはどうしてか。我々も仲間を探すとしよう。”と。

彼等（＝外道達）は仲間を探し始めた。仲間を探しつつある彼等はラクタークシャ (Raktākṣa) という名の出家者³⁹を見つけた。彼等（＝外道達）は彼（＝ラクタークシャ）に語った。

「あなたは私達にとって、共に梵行を有する者である。沙門ガウタマの高弟が、私達との議論の故に召喚されている。彼（＝高弟）は仲間を捜しています。あなたは私達の仲間であるとお考えください。」

〔ラクタークシャは語った。〕「時はいつか。」

〔外道達は語った。〕「今から七日目です。」

〔ラクタークシャは語った。〕

「よろしい。あなた方が集合する時になったら、私に連絡してください。」心が不安であり心配であった外道達は、毎日毎日、仲間を捜した。そして、日にちを数えた。

[p.21, l.16] *Tīrtvas and Śāriputra contest*

さて、七日目に、アナータピンダダ長者は、広い空き地の上に座の準備をさせた。そして、シャーリプトラ具寿のために獅子座が設けられた。様々な土地に住する外道達が集まった。また、シュラーヴァスティーに住する群衆と、その周辺に住する様々な生き物十萬〔が集まった〕。〔その内訳は〕興味を生じた者達、過去の善根によって駆り立てられつつある者達であった。

それから、シャーリプトラ具寿は、眷属を伴ったアナータピンダダ長者によって敬われ、論者の輪に入って後、導かれるべき人を眺めていたので、過去を思い出し⁴⁰、平静で穏やかな振る舞いによって、獅子座に上って坐した。その聴衆は全て注意深い心持ちで、シャーリプトラ具寿を眺めつつ坐した。

³⁹ Schopen も指摘しているが (Schopen, p. 119; p. 176, note IX.12), この人物は、ブツダの舎衛城神変を語る *Divyāvadāna* の第 12 章 *Prātihāryasūtra* においてブツダとも対峙している。尚、この *Prātihāryasūtra* には以下の和訳がある。宮治昭「*Divyāvadāna* 第 12 章 “*Prātihāryasūtra*” 和訳」『文化紀要』(弘前大学教養部), 13 (1979), pp. 117-141; 平岡聡『ブツダが謎解く三世の物語 —ディヴィヤ・アヴァダーナ全訳— 上』大蔵出版, 2007, pp. 265-301.

⁴⁰ 原文では, *smitapūrvaṃ* (Gnoli, p. 24) である。また, Tib は *dran pa sngon du btang ste* 「思いを過去に向けて」(P. 192a5; D. 200b6) とする。ここでは副詞と見なして訳したが, Schopen は *smiling* と訳す (Schopen, p. 120, l. 12; p. 177, note IX.18)。

[p.21, 1.27] *Defeat of the Tīrthyas*

それから、シャーリプトラ具寿は外道達に告げた。
「あなた方よ。まず、あなた方が〔何かを〕造作するのか。あるいは、破するのか。」
彼ら（＝外道達）は語った。「我々が造作する。おまえが破することをなせ。」
シャーリプトラ具寿は考えた。
“もしも私が造作を行うならば、神々を伴う世人すら破することができない。まして、出家者ラクタークシャは言うまでもない。” 以上の様に考えたので、出家者ラクタークシャに以下の様に語った。「あなたが造作せよ。私が破すことにしよう。」と。
彼（＝ラクタークシャ）は魔術に長けていた⁴¹。彼（＝ラクタークシャ）は、花を十分につけたマンゴーの樹を化現させた。〔一方、〕シャーリプトラ具寿は、〔その樹に〕激しい風と雨を与えた。[p. 22] それによって、これ（＝その樹）は根こそぎ引き抜かれて、あちらこちらにまき散らされた。〔他の〕ヨーガをおさめた者達もまた敵ではなかった。
すると、彼（＝ラクタークシャ）は蓮池を化現させた。〔一方、〕シャーリプトラ具寿は若い象を化現させた。
彼（＝ラクタークシャ）は、七つの頭を有するナーガを化現させた。〔一方、〕シャーリプトラ具寿はガルダを化現させた。それ（＝ガルダ）は、それ（＝ナーガ）を掴み去った。
彼（＝ラクタークシャ）は、ヴェーターラ（＝屍鬼）⁴²を化現させた。〔一方、〕シャーリプトラ具寿はマントラでもって〔屍鬼を〕串刺しにした。悪行に結びついていた屍鬼は、“自らを殺そうとするため〔召喚された〕”と考えた。彼（＝屍鬼）は彼（＝ラクタークシャ）の方に向かって行った。すると、彼（＝ラクタークシャ）は恐れ、おののき、震え、毛穴が震え、シャーリプトラ具寿の両足に平伏した。〔ラクタークシャは以下の様に語った。〕
「聖者よ。シャーリプトラよ。お助け下さい。私は〔あなたに〕帰依致します。」と。それから、シャーリプトラ具寿がマントラを解くと。その屍鬼はおとなしくなった。
彼（＝ラクタークシャ）に対して、シャーリプトラ具寿は法を説いた。彼（＝ラクタークシャ）は浄信を生じて語った。
「聖者シャーリプトラよ。私は、よく説かれた法と律において出家と受戒と比丘たることを得たのです。私は、聖者シャーリプトラのもので、梵行を實踐したいのです。」と。
シャーリプトラ具寿は彼（＝ラクタークシャ）を出家させ、受戒させ、教誡を与えた。努力し続け、精励し続け、奮闘し続け、彼（＝ラクタークシャ）は煩惱全てを放棄して、阿羅漢性を現証し、阿羅漢となった。三界に属する貪欲を離れ、土と黄金とを等しいものとし、虚空と掌とに対

⁴¹ 原文では sa indrajāle kṛtāvī (Gnoli, p. 21, l. 33) である。Schopen も指摘する通り indrajāla は魔術を意味することがある (Schopen, p. 177-178, note IX.20)。

⁴² 原文では vetāḍo (Gnoli, p. 22, l. 5) であり、Skt の vetāla に当たる。Cf. BHSD. p. 508a.

して同じ思いを有し、斧と栴檀の法則⁴³を有し、知識によって〔無知という⁴⁴〕卵の殻を割り、知識と神通に対する理解を得て、生存と獲得物と貪欲に顔を背け、インドラやウペンドラを含めた神々にとって、供養すべき、恭敬すべき、敬礼すべき者となった。それから、その群衆は、驚きによって眼が開いた者となり、シャーリプトラ具寿に対して浄信を起こして語った。

「論争の雄牛である偉大な者は、聖者シャーリプトラによって打ち負かされた。」

以上の様に知って、〔その群衆は〕シャーリプトラ具寿の顔を見つめていた。それから、シャーリプトラ具寿はその群衆の思いと傾向、状態、本質を知ったので、四つの聖なる真実(四聖諦)を開示するその様な法の説示をなした。それを聞くと、数千の衆生達が、〔以下の様な〕偉大な勝位に到達した。

〔すなわち〕或る者達は、声聞菩提について発心した。或る者達は、辟支菩提について〔発心した〕。或る者達は無上正等菩提において〔発心した〕。或る者達は帰依と諸学処を保持した。或る者達は預流果を現証し、或る者達は一來果を〔現証し〕、或る者達は不還果を〔現証した〕。或る者達は出家して、煩惱全てを放棄して、阿羅漢性を現証した。更にその群衆は、ブッダへと傾き、法(ダルマ)へと傾倒し、サンガへと傾斜した⁴⁵状態になされた。外道達は〔以下の様に〕考えた。

「我々はこの者(=シャーリプトラ)を、議論において打ち負かすことはできない。方便を企てるべきである。〔我々は〕他ならぬこの場所で、賃金労働者として労働を行おう。それから、弱点を得たならば、施食を使って、この者(=シャーリプトラ)を亡き者にしよう。」と。

彼ら(=外道達)は全員集まって、アナータピンダダ長者のところに行って、語った。「長者よ。おまえは我々の生計の全てを根こそぎにした。それ故、哀れみをなせ。我々は、おまえのヴィハーラにおける賃金労働者として労働を行おう。我々は、ここにおいて長く住んできた。〔この〕土地からの追放者には決してなりたくない。」と。

アナータピンダダ長者は語った。

「まずは私が聖者シャーリプトラに会ってみましょう。」

彼(=アナータピンダダ長者)はシャーリプトラ具寿が居るところに近づいた。近づくと、[p. 23] シャーリプトラ具寿に以下の様に語った。

「<聖者よ。> 外道達が語っています。『おまえは我々の生計の全てを根こそぎにした。それ故、哀れみをなせ。我々は、おまえのヴィハーラにおける賃金労働者として労働を行おう。我々は、ここにおいて長く住んできた。〔この〕土地からの追放者には決してなりたくない。』」と。

シャーリプトラ具寿は精神を集中することを開始した。“彼ら(=外道達)に何か善根が存在するのか、それとも、存在していないのか。”と。

⁴³ 原文では *vāsīcandanakalpo* (Gnoli, p. 22, l. 16-17) である。この文言については谷川泰教氏の研究において、「斧に切られ、栴檀を塗られても、それに対して平等な心である法則」という指摘がなされている。Cf. 谷川泰教「斧と栴檀— *vāsī-candana-kappa* 考—」『高野山大学仏教学会報』18・19(合併号), 1994, pp. 1-14; 同「〔斧と栴檀— *vāsī-candana-kappa* 考(承前)—」『高野山大学仏教学会報』20, 1996, pp. 1-12; 同「斧と栴檀— *vāsī-candana-kappa* 考(補遺)—」『高野山大学仏教学会報』21, 2001, pp. 1-13.

⁴⁴ Tib が *rig pas ma rig pa'i sgo nga'i sbugs dral zhing* (P. 192b6; D. 201b5) とするので、補足た。

⁴⁵ 原文では *buddhanimnā dharmapraṇāṇā saṅghapraṅghārā* (Gnoli, p. 22, l. 30) である。ここで使用される三つの動詞は *Divyāvadāna* においては、樹木についての表現として以下の様に使用されている。*prācīnanimnā prācīnapraṇāṇā prācīnapraṅghārā* (p. 391, l. 18).

彼（＝シャーリプトラ）は知った。“〔外道達に善根は〕存在する。”“誰のもとに結びついたものか。”“他ならぬ私の〔もとに結びついたものである〕。”と。

精神を集中することを終えると、彼（＝シャーリプトラ）は語った。

「長者よ。そ（＝外道達の申し出）の様にせよ。これについて、いかなる差し支えがあろうか。」と。

彼ら（＝外道達）はそのヴィハーラにおける賃金労働者として、労働を行うことを開始した。シャーリプトラ具寿は鞭を巻いた (latāvārika) 乱暴な男を化現させた。彼（＝鞭を巻いた者）は、その労働を行わせはじめた。シャーリプトラ具寿は、彼ら（＝外道達）にとっては、教化するに適時である (vinayakālam) と知って、そこの近くにおける樹木の根もとで経行を行いつつ留まっていた。

彼ら（＝外道達）は彼（＝シャーリプトラ）を見て、考えた。

“今が、この者を亡き者にするための適時である。彼（＝シャーリプトラ）は単独で留まっている。”と。彼らは彼（＝シャーリプトラ）の側に近づくと、取り囲んでから留まった。

シャーリプトラ具寿は〔以下の様に〕考えた。“この者達はどの様な心持ちで近づいたのだろうか。”と。

そして、彼は〔以下の様に〕知った。“殺害に関する心を伴ってである。”彼（＝シャーリプトラ）は、その鞭を巻いた者を化現させ、出てこさせた。

彼（＝鞭を巻いた者）は、彼らを叩いた。「おまえ達は去れ！ 働け！」と〔言いながら〕。

彼ら（＝外道達）は語った。

「聖者よ。シャーリプトラよ。お助け下さい。」

彼（＝シャーリプトラ）は語った。

「具寿（＝鞭を巻いた者）よ。おまえは去れ。その間、おまえ達（＝外道達）は休憩せよ。」と。

彼らは考えた。“この者（＝シャーリプトラ）はこんなにも偉大な御方である。我々はこの者（＝シャーリプトラ）に殺害に関する心を有していた。〔しかし、〕今、我々は友愛の心を有している。”以上の様に考えて後、浄信を生じた。

それから、シャーリプトラ具寿は、彼らの思いと傾向、状態、本質を知って、その様な四つの聖なる真実を開示する法の説示をなした。〔外道達は〕それを聞くと、二十の峰峰を伴った、有身見の山々を、知識という金剛杵よって、打ち砕いて、預流果を現証した。

諸々の真実を知見した彼ら（＝外道達）は〔以下の様に〕語った。

「シャーリプトラよ。私達は、よく説かれた法と律において出家と受戒と比丘たることを得たいのです。私達は、大徳シャーリプトラのもとで、梵行を實踐したいのです。」と。

シャーリプトラ具寿は彼ら（＝外道達）を出家させ、受戒させ、教誡を与えた。努め続け、精勵し続け、奮闘し続ける彼らは、他ならぬこの、五つの輻を有する輪廻の輪が実に不安定であることを知って後、有為なるものの行く末はすべて、切断・落下・散乱・破滅を決まり事とするとして〔それを〕を捨て去って、あらゆる煩惱を放棄して、阿羅漢性を現証した。それ故、彼らは阿羅漢となった。

彼らは三界に属する貪欲を離れ、土と黄金とを等しいものとし、虚空と掌とに対して同じ思い

を有し、斧と栴檀の法則⁴⁶を有し、知識によって〔無知という⁴⁷〕卵の殻を割り、知識と神通に対する理解を得て、生存と獲得物と貪欲に顔を背け、インドラやウペンドラを含めた神々にとって、供養すべき、恭敬すべき、敬礼すべき者となった⁴⁸。

[p.24, l.1] Construction of Vihāras

[p. 24] そこで、シャーリプトラ具寿は、一方において、建築用の縄⁴⁹を握り、アナータピンダダ長者もまた、一方において、〔ヴィハーラ・ストラ〕を握った。シャーリプトラ具寿は微笑みを示し始めた。アナータピンダダ長者は語った。

「聖者シャーリプトラ様。如来方や如来の弟子方は、原因なく縁（条件や間接原因）なくして、微笑みを示すことはありません。聖者シャーリプトラ様。微笑みの示現の原因は何なのですか。縁は何なのですか。」

〔シャーリプトラは語た。〕

「長者よ。それはその通りだ。それはその通りだ。如来方や如来の弟子方が、原因なく縁なくして、微笑みを示すことはない。今、お前は縄を握ったが、トウシタ〔天〕における神の集団において〔も⁵⁰〕、黄金の宮殿が生じたのだ。」

それから、驚きによって目を見開いたアナータピンダダ長者は語った。

「聖者シャーリプトラ様。もしそうであれば、それならば、再度、縄を引き延ばしてください。私は、尚一層、心を清浄に致しますので。」と。

シャーリプトラ具寿が、その縄を握ると、アナータピンダダ長者は、尚一層、激しい浄信の勢い⁵¹によって、心が清浄になった。浄心が生じた直後に、その黄金の宮殿は四宝より成るものとなった。また、彼（＝アナータピンダダ）に対して、シャーリプトラ具寿は〔そのことを〕告げた。すると、アナータピンダダ長者は、非常にすばらしく増大した福德の流れにより、十六の大きなヴィハーラを建設した。また、六十の小屋の〔広さの〕用地⁵²があった。〔アナータピンダダは、〕十六の大きなヴィハーラを建設して後、六十の小屋の〔広さの〕用地をあらゆる設備で満たすと、シャーリプトラ具寿の居るところに近づいた。近づいて後、シャーリプトラ具寿に以下のことを語った。

⁴⁶ 原文では *vāsīcandanakalpo* (Gnoli, p. 22, l. 16-17) である。この文言については谷川泰教氏の研究において、「斧に切られ、栴檀を塗られても、それに対して平等な心である法則」という指摘がなされている。Cf. 谷川泰教「斧と栴檀－*vāsī-candana-kappa* 考－」『高野山大学仏教学会報』18・19（合併号）、1994, pp. 1-14; 同「「斧と栴檀－*vāsī-candana-kappa* 考（承前）－」『高野山大学仏教学会報』20, 1996, pp. 1-12; 同「斧と栴檀－*vāsī-candana-kappa* 考（補遺）－」『高野山大学仏教学会報』21, 2001, pp. 1-13.

⁴⁷ Tib が *rig pas ma rig pa'i sgo nga'i sbubs dral zhing* (P. 192b6; D. 201b5) とするので補足した。

⁴⁸ 「努め続け、精励し続け、……」以下の文言も有部系文献に見られる定型句。Cf. 平岡 [2002], pp. 170-171.

⁴⁹ 原文では *vihārasūtram* (Gnoli, p. 24, l. 2) である。建築作業に用いる縄を指すと考えられる。Schopen は“carpenter's cord”と訳す (Schopen, p. 123; p. 181, note XI.1)

⁵⁰ Tib に *yang* (P. 194a5; D. 203a7) の語が存在することから補足した。

⁵¹ *tīvreṇa prasādvavegena* (Gnoli, p. 24, ll. 13-14) である。Schopen は“through the force of a more and more powerfully deep feeling”と訳す (Schopen, p. 123)。

⁵² 原文では *kuṭīkāvastūni* (Gnoli, p. 24, l. 18) である。用地という訳については BHS の *vastu* の項を参照した (p. 475a)。

「聖者シャーリプトラ様。世尊が道をお進みになるのは、どれほどの量の行進によるのですか。⁵³」

〔シャーリプトラは語った。〕「長者よ。転輪王と同様である。」

〔アナータピンダダは語った。〕「転輪王は、どれほどの量の行進によるのですか。」

〔シャーリプトラは語った。〕「長者よ。転輪王は十クローシャ分の行進により、道を進む。」

それから、アナータピンダダ長者は、シュラーヴァスティーまでの間、そして、ラージャグリハまでの間、これらの中間における、諸々の逗留所⁵⁴を数え挙げて後、諸々の休憩所⁵⁵を建設した。〔また、〕施食の小屋⁵⁶を建立した。〔また、〕時を告げる人⁵⁷を配置した。天蓋と大旗と小旗によって飾られ、梅檀と水が振りまかれ、香水の壺が並べられた諸々のアーチを建立した。〔また、〕適時用の、そして、夜間用の諸々の薬を配置した⁵⁸。

[p.24, 1.9] *Messenger to Buddha*

それから、必需品を準備した彼（＝アナータピンダダ）は、下人に告げた。

「おい。下人よ。お前は出発せよ。おまえは世尊がいらっしゃるところに行け。行って後、私達の言葉を伴って、世尊の両足に礼拝して後、患い少なきこと、悩み少なきこと、起きあがることの容易さ、旅行と体力と安楽とが申し分ない状態であること、心地よく住していることを質問せよ。そして、おまえは以下の様に語れ。『世尊はシュラーヴァスティーにお越しく下さい。私は、世尊に対して、[p. 25] 命の限り、衣・鉢・臥坐具・病気の際の医薬品という〔四つの〕必需品をもって、世尊にそして比丘サンガとにお仕えしたいのです。』と。」

〔下人は語った。〕「かしこまりました。ご主人。」

以上の様に、その下人はアナータピンダダ長者に返答して後、ラージャグリハに出発し、順次、ラージャグリハに到着した。それから、〔下人は〕、道中の疲労を取り払って後、世尊の居られるところに近づいた。近づいて後、世尊の両足に頭でもって礼拝して、一方に坐した。一方に坐して後、その下人は世尊に以下のことを語った。

「大徳よ。アナータピンダダ長者は、世尊の両足に頭でもって礼拝します。-この間、〔仔細は〕前述の通り-、また、心地よく住して居られるかと〔質問しております〕。」と。

〔ブッダは語った。〕

「ああ、下人よ。アナータピンダダ長者とお前とが安楽であれ。」

〔下人は語った。〕

⁵³ 原文では *kiyatpramāṇair āryaśāriputra prayāṇ akair bhagavān adhvānaṃ gacchati?* (Gnoli, p. 24, ll. 21-22) である。

⁵⁴ 原文では *vāsakān* (Gnoli, p. 24, l. 25) である。Schopen は“halting places”と訳す (Schopen, p. 123; p. 182, note XI.9)。

⁵⁵ 原文では *parikramaṇakā* (Gnoli, p. 24, l. 25) である。Tib は *gzhes dag* (P. 194b2; D. 203b5) とする。Schopen は“way stations”と訳す (Schopen, p. 123; p. 182, note XI.10)。

⁵⁶ 原文では *dānaśālā* (Gnoli, p. 24, l. 26) である。

⁵⁷ 原文では *kālārocakaḥ puruṣaḥ* (← *puruṣaḥ* の誤読) (Gnoli, p. 24, l. 26) である。

⁵⁸ 原文では *kālikāni yāmikāni ca bhaiṣajyāny upasthāpitāni* (Gnoli, p. 24, l. 28) である。Tib も *dus kyi dang thun tshod kyi sman dag kyang 'jog tu bcug go* (P. 194b3; D. 203b5) とする。

「大徳よ。アナータピンダダ長者は、以下の様におっしゃいました。『世尊はシュラーヴァステイーにいらして下さい。私は、世尊を、命の限り、衣と鉢と臥坐具と病の際の医薬品葉ための必需品という〔四つの〕必需品でもって、世尊にそして比丘サンガとにお伝えしたいのです。』と。

その下人に対して、世尊は沈黙でもって了承した。すると、その下人は、世尊の沈黙による了承を知ったので、世尊の両足に頭でもって礼拝して、世尊のもとから立ち去った。

[p.25, l.16] *Buddha arrives at Śrāvastī*

それから、世尊は〔自ら〕抑制し、抑制された〔者達を〕従者とし、〔自ら〕寂靜となり、寂靜となった〔者達を〕従者とし、〔自ら〕解脱し、解脱した〔者達を〕従者とし⁵⁹、〔自ら〕勇気づき、勇気づけられた〔者達を〕従者とし、〔自ら〕従順となり、従順となった〔者達を〕従者とし、〔自ら〕応供であり、応供たる〔者達を〕従者とし、〔自ら〕貪欲を離れ、貪欲を離れた〔者達を〕従者とし、〔自ら〕穏やかであり、穏やかな〔者達を〕従者とし、雌牛の集団に取り囲まれた雄牛の様に、若い象に取り囲まれた象の様に、ハイエナの集団に取り囲まれた獅子の様に、ハンサ鳥の集団に取り囲まれたハンサ鳥の様に、鳥の集団に取り囲まれたガルダの様に、弟子の集団に取り囲まれた賢者の様に、病人の集団に取り囲まれた良医の様に、戦士の集団に取り囲まれた勇者の様に、旅行者の集団に取り囲まれたガイドの様に、商人の集団に取り囲まれた隊商長の様に、下人に取り囲まれた家長の様に、臣の集団に取り囲まれた城塞の王の様に、千人の息子に取り囲まれた転輪王の様に、星の集団に取り囲まれた月の様に、千の光線に取り囲まれた太陽の様に、ガンダルヴァの集団に取り囲まれた〔ガンダルヴァの王〕ドゥリタラーシュトラの様に、クンバーンダカの集団に取り囲まれたヴィルーダカ（増長天）の様に、ナーガの集団に取り囲まれたヴィルーパークシャ（多彩な眼を持つ者）の様に、ヤクシャの集団に取り囲まれたダナダ（財宝の施与者）の様に、アスラの集団に取り囲まれた〔アスラ王〕ヴェーマチトラ（勝れた機）の様に、三十〔三の神々〕の集団に取り囲まれたシャクラの様に、ブラフマカーヤ（梵衆）に取り囲まれたブラフマンの様に、海が確固である様に、雲が潤っている様に、象の王が興奮を離れているに、よく抑制された諸感官により、振る舞いと行動は動揺せず、三十二の偉人相により莊嚴されており、八十随好により四肢は輝き、一尋の光輝によって身体が飾られ、千の太陽を凌ぐ光輝を有し、動く宝山の様に、あらゆる側面で美しく、[p. 26] 十力・四無畏・三つの不共なる念住と大悲を具備しており、比丘サンガとともに、眷属を有するアナータピンダダ家長とシュラーヴァステイーに住する多くの人々と十万の神々によって付き従われつつ、シュラーヴァステイーの街に至った⁶⁰。

また、シュラーヴァステイーの街に入りつつある世尊が決意を伴い⁶¹、都市の敷居に右足を置いたその時、大地は六様震動を生じた。この大いなる大地が動き、波打ち、動揺した。震え、震動し、揺れ動いた。〔第一に、〕東の方が浮き上がり、西が沈み込んだ。〔第二に、〕西〔の方〕が浮き上がり、東〔の方〕が沈み込んだ。〔第三に、〕南〔の方〕が浮き上がり、北〔の方〕が沈み

⁵⁹ 原文では mukto muktaparivārah (Gnoli, p.25, ll.17-18) であるが、Tib には欠落 (P195a2; D204a7)。

⁶⁰ 「世尊は〔自ら〕抑制し、抑制された〔者達を〕従者とし、…」以下の文言は有部系文献に見られる定型句と指摘される。Cf. 平岡 [2002], pp. 174-175.

⁶¹ 原文では sābhisamkāraṃ (Gnoli 26.6)。ブッダが都市に入る時、この語がしばしば見出され、その際に大地が震動する等の記述が後続することがある。Cf. BHSD, p. 591.

込んだ。〔第四に、〕北〔の方〕が浮き上がり、南〔の方が〕沈み込んだ。〔第五に、〕周囲が浮き上がり、中心が沈み込んだ。〔第六に、〕中心が浮き上がり、周囲が沈み込んだ。

また、世界の中間⁶²とともに、この世界すべては崇高な光輝により満たされ、覆われた。また、中空では、神々の諸々の太鼓が打ち鳴らされ、地表に住する神々は、世尊の上空で、神々しき蓮華を散ずることを開始した。〔すなわち、神々は、〕パドマとクムダとプンダリカ、〔そして〕アガルの粉とサフランの粉とタマーラの葉と神々しきマーンダラの花々を散じ、また、諸々の衣を散ずることを行った⁶³。

[p.26, l.17] *Effects felt following Buddha's arrival*

世尊が都市へ入る時には、以上のその様な類の希有なる数々のことがあった。また、以下の数々のこと〔もあった〕。縮んだ〔物〕は広がる。低い〔物〕は高くなり、また、高い〔物〕は平らとなる。象達は高鳴き、馬達はいなき、雄牛達は吼える。〔また、〕家に有る種々のヴァーディトラ〔という楽器〕・バーンダ〔という楽器〕はら音を出す。視覚障害を持つ人々が視力を得る。聴覚障害を持つ人々が聴力を、言語障害を持つ人々が発話能力を有する状態になる。感官が残るが〈不完全である〉人々が、〔完全な〕感官を得る。酒により酩酊状態に陥った者達は、冷静になる。毒を飲んだ者達は、解毒状態となる。互いに敵対している者達は、慈しみを得る。懐妊した女性達は、安楽に出産する。牢に繋がれた者達は解放される。財産無き者達は、〈財産の数々〉を得る。

以上のこと、〈そして〉他の尋常ならざることの数々が、世尊が都市へ入る時に顕現する⁶⁴。

[p.26, l.28] *The Jetavana*

それから世尊は、以上の様な類の大いなる尊敬を伴って、シュラーヴァスティーに入った。入って後、比丘サンガの前で、準備されたばかりの座に坐した。

さて、アナータピンダダ長者は、友人・親類・縁者の人々に取り囲まれ、[p. 27] 黄金の瓶を携えて後、水を注ぐことを開始した。〔しかし、〕彼は〔水を注ぐことを〕完遂できなかった。そこで、アナータピンダダ長者は落胆して〔以下の様に〕考えた。

“一体、私により、いかなる罪深き行為がなされたのであろうか”と。

世尊は語った。

「長者よ、お前はいかなる罪深き行為もなしてはいない。そうではなく、〔昔、〕この土地に住していたお前は、過去の正等覚者達に対して、この土地を奉献したのだ。他の土地に立って、〔水を〕撒いてみよ。」

彼（＝アナータピンダダ）は〈他の土地に立って〉〔水を〕撒いてみた。

世尊は五つの肢分を備えた音声⁶⁵によって、他ならぬ自分自身でジェータヴァナに向かって語り

⁶² 原文では lokāntarikā- (Gnoli 26.12). 暗く、「煉獄」の様な場所とされる。Cf. BHSD, p. 454.

⁶³ 「また、シュラーヴァスティー市に入りつつある世尊が…」以下の文言も有部系文献に見られる定型句である。Cf. 平岡 [2002], pp. 178-180.

⁶⁴ 「世尊が都市へ入る時には、以上のその様な類の希有なる…」以下の文言も有部系文献に見られる定型句である。Cf. 平岡 [2002], pp. 178-180.

⁶⁵ 原文では pañcāṅgopetena svareṇa (Gnoli, p. 27, l. 7).

かけた。ジェータヴァナが語りかけられつつある時、ジェータ王子は〔以下の様に〕考えた。
“ああ。世尊は私の名前への言及を⁶⁶、第一になして下さるだろうか。”と。

世尊はジェータ王子の思いを心でもって理解して、第一に〔名前への〕言及をなした。
「比丘達よ。これがジェータヴァナである。アナータピンダダの僧院である。」と。〔それを〕聞いたので、ジェータ王子は“世尊は私の名前を第一に言及して下さった。”と〔考えて〕、尋常ならず〔心が〕浄らかとなった。彼（＝ジェータ）は喜びと昂揚を生じ、その一切合財により⁶⁷、世尊のために、四宝より成る門屋を建立した。

それにより、合誦をなす長老達も、経を編纂されるのである。「世尊は、シュラーヴァステイーにあるジェータヴァナの中のアナータピンダダの僧院において滞在して居られた。」と。

(翻訳未完)

The Place of Practice of Buddhist Monks

—A Japanese Translation of the *Śayanāsanavastu* of the *Mūlasarvāstivādinaya* (1)—

Summary

The *Śayanāsanavastu*, or ‘Section on Bedding and Seats’, is a collection of rules related to the place of practice of Buddhist monks. It also refers to the donation of *vihāras* by lay believers such as Anāthapiṇḍada, and explains how the Buddhist Saṅgha should receive and manage such *vihāras*. Furthermore, the text describes the function and role of *vihāras* from the points of view of both Buddhist monks and laymen. Six early schools of Indian Buddhism, viz. Theravāda, Dharmaguptaka, Sarvāstivāda, Mahīśāsaka, Mahāsaṅghika, and Mūlasarvāstivāda, have each transmitted their own ‘Section on Bedding and Seats’. Here, I present a Japanese translation of the *Śayanāsanavastu* of the *Mūlasarvāstivādinaya* in comparison with relevant texts in the Pāli Vinaya and the four Chinese versions of the Vinaya (『四分律』, 『十誦律』, 『五分律』, 『摩訶僧祇律』), as well as the Tibetan translation of the *Śayanāsanavastu*, in order to shed light on the real life of Buddhist Monks in India.

<キーワード> *Śayanāsanavastu*、*vihāra*、根本説一切有部律、臥坐具犍度、精舎、舎利弗、給孤独長者、カルヤーナバドラ、布施

⁶⁶ 原文では *nāmodgrahaṇam* (Gnoli, p. 27, l. 9) である。直訳すれば、「名前を取り上げること」ということになる。

⁶⁷ 原文では *sarveṇaiva tena dravyajātena* (Gnoli, p. 27, l. 14) である。Tib は *des nor gyi rigs thams cad kyis* (P. 196a7; D. 205b6) である。